

遊戲王—creator—

月花撩亂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遊戯王が盛んで、プロデュエリストが多く、の若者達の憧れの世界。

舞台はデュエルアカデミアに並ぶ超名門高、『天皇創世学園』。

多くのプロデュエリストを生み出した由緒正しき学園である。

名も無き主人公は、ここから頂点目指してかけ上がる！

目次

世界観・設定	1
1 話く伝説の始まりく	4
2 話く祭囃子は鳴り響くく	13
3 話く圧倒するは炎剣の乱舞く	26
4 話く決着。その果てく	37
5 話くその男、伝説につきく	46
6 話く此処が我等の拠点となりてく	53
7 話く嗚呼騒がしき日常く	59
8 話くうちひしがれるはチャンスなりく	66
9 話く期待の星々く	73

1 0 話く宴の終わりは静寂と余韻に包まれるく	81
1 1 話く目覚めく	88
1 2 話く幕開けの鼓動く	94
1 3 話く超天星く	102
1 4 話く乱戦く	110
1 5 話く戸惑い、覚悟く	119
1 6 話く夢宴、祭囃子く	125
1 7 話く先攻展開く	131
1 8 話く振り子揺れし時、悪魔は笑うく	139
1 9 話く数多の壁を乗り越え、彼らは笑うく	149

20	話 誰が言った？	161
21	話 覇王の因子	173
22	話 第一陣、決着	183
23	話 陰陽戦線	198
24	話 集まれフレンズ、雪の降る世界	209

世界観・設定

●世界観

武藤 遊戯がデュエル王になってからおおよそ百年以上先。

デュエルモンスターズは今もなお世界を湧かせる熱き競技として、多くの若者はプロデュエリストになることを夢見ている。

●主な話の舞台

海馬コーポレーション等、多くの企業、貴族が共同して創り出した、プロのデュエリストを夢見る者達のための学校、『天皇創世学園』。

学力だけでなく、小さな街一つにも及ぶ規模の敷地、数々の寮や教育意識の質。

どれもが最高レベルであり、ここから出たプロデュエリストも多く存在している。

そのため、この学校に入った者はほぼ全て、プロデュエリスト、もしくはデュエルモンスターズに関する職に就くのが目標とされている

●カードのレア度、流通、本物、偽物について

遊戯達がいいた頃より、はるかにカードの流通は増えた。

例えば、当時は世界に4枚しか無かったとされる『青眼の白龍』も、イラスト違いが

数種類生み出され、青眼の所持者はかなり多くなつた。

また、ノーマル等の低レアとして、「偽物（レプリカ）」が大量に流通されるようになり、所持するだけなら簡単になつたカードも豊富である。

が、需要と供給の具合によつては学生では決して買えないようなカードも多々存在しており、いかに安く、それでいてしっかり構築するかもやはりつきまとう。

また、『本物』と『偽物』の真の違いは、ソリッドビジョン使用時の迫力、衝撃にある。『偽物』の青眼の白龍がブレスを放射して周囲に強い風を巻き起こしたとすると、『本物』は爆風を巻き起こしかねない。

それゆえ、カードパワーの高い『本物』のレアカードは数が少ないことも多く、カードが傷つく事やデュエルによる怪我を恐れてあえてレプリカを使う者もいる。

また、各地で頻繁に行われるあらゆる大会の景品でそういったレアカードを配布や贈呈される事が多く、優勝すれば知名度が上がりやすいため、プロデュエリストを目指す若者程大会に参加している頻度は高い。

● 白皇家

海馬コーポレーションの社長であり、デュエル王と対等であり続けた伝説の人物、海馬 瀨人を崇拜する貴族。

天皇創世学園への資金援助をどの貴族、企業よりも多くしており、それなりの権力を

持つ。

また、それだけ遊戯王に入れ込んでいたために子供は英才教育の一つにカードも取り入れる事になっていて、実力はプロデュエリストレベルだらけ。

特に物語の年代の白皇家は、現役プロデュエリストが何人も存在している。

また、海馬 瀬人を崇拜しているだけあり、一族は常に『青眼使い』であることも有名。

ただ、長年続く由緒正しき本物の貴族であり、プライドが高く、人を見下した態度の者も少なくはないため、よく思わない敵もそれなりに多い。

● マスタールール

マスタールールは2020年4月以降の物を使用。

ただ、値段が高すぎたり現実世界のように種類が豊富ではないため世界的にあまりリンクモンスターが繁栄していないので、誰しもがハリファイバーを持っている、等は無く、わざわざ使わなくても戦える構築にする者が多い。

1話～伝説の始まり～

4月7日。そう聞けば、大抵の人間が思い付く事。

そう、学校の入学式だ。

おおよその学校と呼べるものは、この日近辺を「始まりの日」とする。

その例に漏れず、この話の舞台となる、『天皇創世学校』も、今日この日を、入学式と
している。

「おはよー!」「おはよー、これからもよろしく!」

「これからはライバルだからな!」「お前には負けねえよ!」

わいわいガヤガヤと、元気で騒がしい声が多数、この広大な敷地にある、これまた特大な体育館を目指して歩いていく。

彼等は、一般的な学生とは少しばかり異なる。

高めの授業レベルに加え、彼等はプロの「デュエリスト」を目指し、それを授業に取り組み、学ぶ。

それがこの天皇創世学校の最も大きな特色。

異常な程広い敷地に、幾多もの寮や学科棟がそびえ立ち、ここを出ることなく生きて

さえいけるだけの物資の充実性がある。

カードゲームが世界でも最も盛んな競技として存在するこの世界においても、これほどまでに広大な学校は、離島にあるデュエルアカデミアを除けば数える程も無いだろう。

「見て！あの人！」「わあ、きれい……！」

「おいおい、あの胸元の紋章は……！」「マジかよ……！よりもよって俺達の世代か……！」

ある少女を見て、周りにいる者達が皆口々に声を出していく。

透き通るような白い肌、蒼く宝石のような瞳。それを内包するは見下すかのようなつり目。

可憐な姿とは裏腹に、そのやややふくよかな胸元には、高貴なる白き龍の紋章を刻まれており、他の学生とは明らかに違うと言える風貌をしている、そんな少女は屈強な男を4人程引き連れ、優雅にゆらゆらと歩いている。

それはまるで、皇のきまぐれによる凱旋のごとし。

それを目にした者達は、たちまち目を奪われ、その白き龍の刻まれている意味を理解し、絶望する。

彼女は「白皇 凜音（はくおう りんね）」。

この学校の創始者達の一人である白皇家その子孫であり、代々プロデュエリスト、も

しくはカードゲーム会における重鎮、天皇創世学校の役員等、この学校にとても強い結び付きを持ち、それゆえ当然の如く子供でさえもプロに張り合えるだけの腕前を持つ。そんな者が一人現れた。それはつまり、この世代でのプロデュエリストの「梶」は既に一つ潰れたと言ってもいいのだ。

憧れと羨望と絶望。あらゆる声をBGM代わりに、凜音はさほど興味など無さそうに体育館を目指す。

（ふつ、くだらない…私の姿とこの紋章を目にしただけで項垂れる弱い者ばかりが同級生だなんて。私と張り合える人はいないのかしら…）

そう、彼女は中学時代でさえ、張り合える者など殆んどいない程に突出した腕を持ち過ぎた故、退屈な時を過ごしてきたのだ。

（とはいえ、流石に高等学校。少しは張り応えのある人はいるといいのだけど。）

そんなのいるわけもないか。そうため息を吐き、道を歩いていく凜音。

だが、彼女は知るよしもない。高等部には、自分の想像も越えるような「化物」が待ち構えている事を。

「…はあく、白皇（はくおう）、か。…：…なんか、相撲の力士みたいな名前だなあ。」

「「っ!?!」」

ふと、すぐ側の原っぱから聞こえた、白皇家への侮辱とも聞こえる男の呟き。

それは凜音の耳に入り、辺りにいた学生達はその凜音の放つ迫力に怖じ気づき、静まり返ってしまふ。

「いま、なんて言ったのかしら……？ その貴方……！」

大人しそうな見た目からは想像も出来ない程の張り上げた力強い声。彼女の側にいる男達も、その声に思わず萎縮する。

が、当の少年は気にする事なく、のそのそと起き上がり、朗らかに笑いながら喋りだすのだ。

「いやあ、怒らせちゃったのか。悪い悪い。いや決して悪口として言った訳じゃないんだ。横綱のように高い位にいなそうなたツコいい名前だなんて、素直に思ったのさ。」

立ち上がるなりパンパンと服を払って汚れを落としつつ凜音の前に立つ少年。

背丈は170を少し越えたくらいだろうか。

根元が黒い金髪の、上着を羽織った彼は悪気もなくヘラツとしている。

「お前、この方に近づきすぎだ！ この方がどなただと思ってる！」

当然、取り巻きの男達は少年を近づけぬようと怒号する。が、

「お待ちなさい。今、私がこの者と『二人で』会話をしているのよ。」

威圧。有無をも言わさぬ威圧。

男達はたじろぎ、すぐごと引き下がった。

「…貴方、名前は？」

名を問うは凜音。腹立たしい相手ではあるが、だからこそ名を知るべきと思った。

自分に挑発的、侮辱的態度をとり、なおかつ威圧しても相変わらずヘラヘラしている者だ。

もしかしたら、自分の関わりの無かった、同世代の『強者達』の誰かなのかもしれないからだ。

「おっと、挨拶が遅れたな。

俺の名前は『暁 光夜（あかつき こうや）』。よろしく、レディ。」

左手を胸元に当てつつ右手を広げ、少し屈んで挨拶をする少年、光夜。

世に言うイケメンに値する彼の風貌からなるその滑らかなる所作は、野次馬をしている少女達をついドキリとさせる。が、

「…そう。残念ね、貴方の名前は初めて聞いたわ。

強者のどなたかと思って期待はしたのだけれど。私の事も知らない程度ならそもそも大したこと無さそうね。」

落胆。それもそのはず、凜音の知る中に、光夜の名前は当てはまらない。

つまり、大会で優勝したりどこぞの有名な人だったりという事のない、『単なる一般人』の、それも世界的に有名な白皇家の怖さすら知らないレベル。

底辺の怖いもの知らずとしか思えないのだから。

「ずいぶんご挨拶じやないか……まあ、これが井の中の蛙、つてやつなんだろうなあ……」
周囲が凍りつくかの如く、凜音から恐ろしい殺気。
完全に怒らせてしまったようだ。

「……貴方、どうやら立場をわかっていないみたいね……」

いいわ。この私、『白皇 凜音』が命じます。

今日この場にて、貴方を『退学処分』とします。」

その言葉には流石に光夜も驚く。

何故なら、自分と同年代の少女から退学処分を言い渡されるだけで無く、周りの野次馬からも罵倒の嵐が飛び交ってくるのだから。

「えっ、いや、なんで君に退学なんて言われなさいいけないんだ?」

「私の家系は古くからこの学校に多額の寄付をしているの。そしてそこらの教員と同等、もしくはそれ以上の権力を持つ事を許されている。貴方一人退学にするなんて、簡単なのよ?」

どこまでも見下した、冷めた眼で光夜を見つめつつ淡々と告げる凜音。

「いやあ、流石に入学早々退学は困るな。」

なんとか許してくれないか?」

あくまであわてふためく事もすがり付く事もせず、困り顔をして問いかける光夜。

「どうして貴方程度の虫にたいして情けをかける必要があるのかしら？ さようなら、虫さん。」

ふんつ、と興味を無くしたように凜音は歩き始める。

しかし、

「…なんだ、白皇家つてのは相手の力量も見極められなければ権力だけで物を言うのか。こんなのが偉ぶって頂点だなんて言うんなら、この学校も大したことないんだな。」

再三の侮辱を受け、凜音は立ち止まる。

発言したのはやはり光夜。もちろん悪びれる様子などない。

「…今、なんて言ったのかしら…」

「聞こえないふりはよせよ臆病者の井の中の蛙。相手が強いかどうかも見極められない程度の実力で権力振りかざしてふんぞり返るんだ、さぞ負けるのが怖いんだろう？」

今度は凜音が光夜に見下されている。

それがわかるほど、先ほどとはまるで別人かのような表情と雰囲気。

その雰囲気直に味わい、ようやく凜音は理解した。

この男は、普通では無いのだと。

「あの」白皇家の者を相手にして、頭を下げる事も無く、あまつさえ見下す者など普通は

いないのだ。

しかし、周りの者達はそれがわからないらしく、凜音を侮辱した事を蔑んだりし続けている。

「…いいわ。貴方にチャンスをおあげます。

放課後、私とデュエルしましょう。もし仮に勝てたなら、もしくは私が貴方を認めるような事があったのなら、退学は取り消してあげる。」

凜音からの唐突の提案を聞いて、野次馬達はざわめく。

あの白皇 凜音がこうも簡単に発言を曲げるなんて、と思っっているからだ。

「おつ、本当に？ いやあくありがたい。

それならもつと条件変えようぜ。俺が勝ったらあんたは俺の下僕な。で、俺が負けたら…俺は死んでもいいぞ。」

まるで既に勝ったかのような発言の後、衝撃的な提案。

だが、

「…ええ、いいわ。私に勝てる人なんて、数える程度しかいなかったの。その私に勝てると思っっている命知らずの貴方の顔、今日限りで見なくて済むなら嬉しい要求よ。」

光夜の提案を承諾した凜音。

その発言を聞いた光夜。

2人は満足そうに微笑む。

既に野次馬達には付いていけない世界である。

「そろそろ急がなくては遅刻してしまうわ。ではごきげんよう。」

凜音が去っていったのを皮切りに、野次馬達も急いで散らばっていく。

そんな喧騒の中、光夜も歩き始め、一人眩く。

「…だから言ったんだよ。井の中の蛙、つてな。」

2話く祭囃子は鳴り響くく

あれから数時間経過した放課後。

朝に起きた「とある事件」の影響によるざわめきは多数あれど、入学式はつつがなく終了。

入学生代表は、当然のごとく白皇 凜音。

朝の事などまるで無かったかのように、きびきびと、気品溢れる言葉を口にしていた。入学生が終わった昼過ぎ。

学園にいる生徒の大半は一つの施設へと集まっていた。

『デュエルコロシアム』という、観客数1000人を内包出来る、かつ天井から降りた大きなモニターからデュエルを観戦することの出来る、天皇創世学園の特製デュエルフィールド。

対戦するのはもちろん、入学初日から事件を起こして退学を命じられた暁 光夜（あかつき こうや）と、退学を命じた少女、名家たる白皇家の娘、白皇 凜音（はくおうりんね）。

初日から『あの』白皇家の者のデュエルとあつては、対戦相手がどこの馬の骨である

うと見ない訳にはいかない。

既にフィールド上にて静かに待つ凜音。

まだかまだかとぎわめく観客。

凜音がフィールドに上がっておよそ10分。

ようやく光夜が姿を現した。

「…いやあ、悪い悪い。この学校敷地広すぎて迷子になってたぜ…」

「…いえ、構わないわ。明確な時間指定をしなかったのだから。それにしても、逃げずにここに来た事、まずは褒めて差し上げます。」

焦る素振りもなくゆつたりと登場し、凜音と約2 m程の距離でにこやかに話し出す光夜。

光夜はいわゆるイケメンに値し、モニターに映るその朗らかな表情についてドキリとする少女は多数。

しかしながら、凜音には何も影響は無さそうで、淡々と会話を交わす。

「そりゃあ来ない訳にはいかないだろう。あつ、入学式の演説良かった。お疲れ様。」

「あら、それはありがとう。でも今さら胡麻をすろうとしても無駄よ?」

光夜の労いを軽くあしらう凜音。

既に今日でいなくなる相手としか認識していないのだ。

「ではデュエルの前におさらいよ。

ライフは8000。先攻はドロワー無し。サレンダー無し。

貴方が勝てば退学取り消しと私を下僕に。

貴方が負けたら、貴方は今日でその命を絶つ。それで良かったかしら？」

凛音から発せられる衝撃のルール。

お互いに負けられるはずのないデュエル。

特に、白皇の血筋の凛音に勝つという無謀とも言える内容で、光夜は生死がかけられている。

だが、

「おう、オツケーだ。せっかくのデュエル、楽しもうじゃないか。」

あっけらかんと承諾。

自分の命が惜しくないのだろうか？

「では始めましょう？先攻は…」

「ああ、先攻はあんたに譲るよ。レディファーストって奴さ。」

先攻の方が有利になりやすい遊戯王において、光夜は先攻を譲ると言い出す。

後攻がどうしても欲しいのか、それともただの馬鹿なのか。

観客が戸惑う中、準備は進んでいく。

お互い腕に機械を装着し、そこにある窪みに己のデツキを置く。すると機械が作動しはじめ、やがてグラフィックのディスクを形成する。それを確認するなり、2人はモノアイのような機械を顔に装着。これで準備は出来た。

「…ふう、では、良いかな？」

「…ええ。私達のデュエルを」

「…始めよう（ましよう）」

暁 光夜と白皇 凜音、2人の命運をかけた決闘が、今始まった。

「お言葉に甘えて私の先攻。まずは…」

《青き眼の賢士》を攻撃表示で召喚。召喚した時にデツキからレベル1の光属性チューナーを手札に加えます。私を手札に加えるのは、《エフェクト・ヴェーラー》。

ソリッドビジョンによって実体化するモンスター。

リアルにしか見えないその迫力に、観客は大盛り上がりである。

「ヴェーラー…強いカード持つてくるな。」

「続いて、手札にある《太古の白石》をコストとして捨て、《ドラゴン目覚めの旋律》を発動。デツキから攻撃力3000以上、守備力2500以下のドラゴン族モンスターを

2枚まで手札に。私に加えるのは、《青眼の白龍》、《青眼の亜白龍》。

そして、手札の青眼の白龍を見せる事で、青眼の亜白龍を特殊召喚。来なさい、オルタナティブ!!」

右手を天に掲げ、凜音が叫ぶ。

現れたのは、白き龍。飛翔し、翼を羽ばたかせて降臨したその龍は、美しくも恐ろしい、その青き眼を光夜に向け咆哮。

青眼の亜白龍、攻撃力3000。

コロシウムすら揺るがす程の衝撃に、観客は思わずビビり、光夜はすぐに理解する。

「…すげえ、これが『本物』…」

「ええそうよ。白皇家は安っぽい《偽物》なんて使わないの。それが私達白皇家の『誇り』だもの。」

そして、手札の青眼の白龍をコストに、トレードインを発動! テツキからカードを2枚ドローします!

更に、青き眼の賢士と青眼の亜白龍でシンクロ召喚! 私の元姿を見せなさい。《青眼の精霊龍》!!!」

チューナーという性質を持つモンスターを元手にモンスターを足していき、レベルの合計値のモンスターを呼び出すシンクロ召喚。

2体のモンスターが分解され、一筋の光となる。

その光が爆発して輝き、その光の中から一体の龍が現れる。

青眼の精霊龍、守備力3000。

「す、すげえ……」なんて美しき……」

観客からは驚きの声か沸き起こる。

先程の青眼の亜白龍とは違い、静かに現れた半透明の白龍。あまりの美しさに、凜音すらうっとりしている。

「ああ、なんて美しいのかしら……そして、私はカードを2枚セット。そしてエンドフェイズに墓地に眠る太古の白石の効果。デッキから青眼の白龍を攻撃表示で特殊召喚！」
現れたのは、原典（オリジナル）の中の原典。

最強の通常モンスター、青眼の白龍。

攻撃力3000のスペックは下手な効果モンスターすら容易く撃ち滅ぼす。

そして、この青眼の白龍、先程の青眼の亜白龍よりも威圧感が凄いのだ。

流石の光夜でさえ、一筋の冷や汗を垂らす。

「これで私のターンは終了よ。さあ、足掻いて見なさい。」

凜音：ライフ8000 手札2枚。

フィールド：EXゾーン・青眼の精霊龍（守備表示）
メインモンスターゾーン・青眼の白龍（攻撃表示）

魔法・罨ゾーン・2枚セット

満足そうにターンを終了する凜音。

そして、ここから謎に包まれていた光夜のターンが幕を開けるのである。

「…俺のターン、ドロロー。まずは…」

手札から《封印の黄金櫃》を発動！

「…封印の黄金櫃?!」

封印の黄金櫃。

デッキからカードを除外して、2枚ターンの時間を掛けて手札に加えるカード。

手札交換として見れば強くはないが、除外することに意味のあるカード。

その除外する事によるメリットの強さ故に制限（デッキに1枚しか採用出来ない事）
カードに指定されている。

この時点で、光夜への警戒心を一気に高める凜音。

「デッキから除外するのは…《ネクロフェイス》！」

ネクロフェイスは、ゲームから除外されるとお互いのデッキを上から5枚除外する！」

「くつ、まさかネクロフェイスだなんて…」

ネクロフェイスは想定外の凜音。

苦悶の表情を浮かべながら、凜音はデッキから上を捲る。

《トレードイン》

《青き眼の乙女》

《復活の福音》

《ドラゴン目覚めの旋律》

《エフェクト・ヴェーラー》

（こ、これくらいなら痛くなどないわ…ええ、問題ない。）

「…俺の除外されたカードは…」

怖じ気づいたものの、除外されて困るようなカードがろくに無かったため、安堵する

凜音。

続いて、光夜のデッキから外されたのは…

《不知火の影者》

《不知火の宮司》

《異次元からの埋葬》

《手札抹殺》

《ネクロフェイス》

「またネクロフェイス：!?!しかもそのテーマは…!!」

凜音を驚かせ続ける驚異的な引き。

ネクロフェイスは、連鎖するのだ。

そして、『不知火』は除外を得意とするテーマ。

彼等もまた、効果を発揮する。

「ネクロフェイスが除外されたんでもう一度お互いのデッキを除外する!更に、ゲムから除外された《不知火の影者》、《不知火の宮司》がそれぞれ効果を発動!

影者で宮司を特殊召喚。宮司は精霊龍を対象に取り、破壊する!」

「っ!?!なんですって!?!」

僅か1枚の黄金櫃から暴れだした光夜。

驚愕の色を隠しきれない凜音ではあるが、この程度ならば問題はない。

「くっ、仕方ない…青眼の精霊龍の効果発動!自身をリリースし、光属性のシンクロ

モンスターを守備表示で特殊召喚します。来なさい、《蒼眼の銀龍》!」

青眼の精霊龍を早い段階で失ってしまったが、凜音は潔くその効果を発動。精霊龍は別の龍を呼び、凜音の守護を託してフィールドから消えた。

この蒼眼の銀龍、特殊召喚され時に自分フィールドのドラゴン族モンスターを効果対象、破壊効果から護る効果を持つ。

そのため、今場にいる青眼の白龍、蒼眼の銀龍は対処するのが非常に困難である。

蒼眼の銀龍、守備力3000。

が、光夜は気にする事なく、手札からカードを1枚取り出し、高らかに宣言した。

「ならば、その上に手札から速攻魔法、《大欲な壺》を発動！ネクロフェイス2枚と不知火の影物をデッキに戻し、1枚ドローする！」

「大欲な壺…まさか…！」

大欲の壺とは、ゲームから除外されたモンスターを3枚デッキに戻し、1枚ドローするカード。

これにより、ネクロフェイスは再びデッキの中に。

光夜の意図に気づいて狼狽する凜音をよそに、光夜は大欲な壺の効果で選択した3枚を戻して1枚ドロー。

その後宮司を特殊召喚する。

そして再びネクロフェイスの効果で凜音はカードを除外する事に。

《青眼の白龍》

《復活の福音》

《ハーピィの羽根箒》

《白き靈籠》

《太古の白石》

(くっ、重要なカードばかり…)

2度目の除外は、凜音の精神にすらダメージを与えた。

もし長期戦になったなら、この5枚の除外は確実に凜音を苦しめる事を知っているからだ。

そして、除外すればするほど有利になるのが光夜のデッキ。

彼のネクロフェイイスの処理が始まる。

《不知火の宮司》

《不知火の武部》

《不知火の武士》

《仁王立ち》

《ネクロフェイイス》

「またネクロフェイイス
!!???」

予想外過ぎる引きに、思わず冷静さを失う凜音。

だが、凜音の地獄はこれからであった。

「更にいくぞ！ネクロフェイスの効果にチェーンして不知火の武部と武士の効果！武士で除外されている武部を手札に！武部によりデッキから1枚ドロし、1枚捨てる！！」

「な、なによこれ…なんてめちやくちやな…！」

ひたすら回し続ける光夜を、凜音はただ見ている事しか出来ない。

「武部の効果で1枚ドロし、手札から《不知火流 才華の陣》を墓地に送る！」
光夜が何がしたいのか、ほとんどの者がついていけない。

そんな中、またしてもネクロフェイスが凜音のデッキを蝕んでいく。

《青き眼の賢士》

《青き眼の祭司》

《調和の宝札》

《白き靈龍》

《青眼の亜白龍》

(うう、また強いカードばかりが…)

まるでゴミのように取り除かれていく凜音のカード達。辛くない訳がない。

そして、続く光夜の除外は…

《不知火流 転生の陣》

《シノビネクロ》

《ハーピィの羽根箒》

《妖刀―不知火》

《ギョラクシーサイクロン》

(…さ、流石にネクロフェイスは打ち止めのようなね…まあ、あれだけ除外した所でこの布陣を破るなど…)

ようやく止まった連鎖に、凜音は安堵する。

この盤面なら、まず負ける事はないと知っているからだ。

「…さて、ここからだな。」

「…えっ？」

そう、光夜はまだ、動き始めたばかりなのであった。

彼はまだ、走り始めたばかりである。

3話～圧倒するは炎剣の乱舞～

「…俺は、手札から《不知火の影者》を召喚する。」

光夜がようやく通常召喚を行う。

不知火の影者は、攻撃力は500しか無いものの、自分のアンデッド族をリリースし、デッキから守備力0のアンデッド族チューナーモンスターを特殊召喚するという強力な効果の持ち主。

その能力を知っている凜音、ここぞとばかりに手札からカードを切る。

「手札からエフェクト・ヴェーラーの効果、不知火の影者を対象に、効果を無効化させます。」

冷静さを取り戻した凜音は、最初に青き眼の賢士でサーチしてきたエフェクト・ヴェーラーの効果を発動する。

エフェクト・ヴェーラーは、対象に取ったモンスターの効果を1ターンの間無効化させるカード。

しかし…

「墓地に存在する《不知火流 才華の陣》の効果発動。不知火の影者を対象にし、このターン影者はカードの効果を受けなくする。」

光夜はエフェクト・ヴェーラーを手札に持っていることを知っているため、焦ることなく、淡々と対処する。

墓地に才華の陣があるにも関わらずエフェクト・ヴェーラーを使用した凜音の行動を怪しんだり、嘲笑う声が少しばかり聞こえてきた。

（対処される事くらいわかっていているわ…でもね、もし切り札となりうるアンデッドモンスターが出てきた場合、才華の陣が墓地にあつてはいざという時に困るのよ。）

当然ながら、凜音は対処される事自体は想定範囲内であつた。

それでも構わず使つたのは、ここが使いどころだと”普通なら”思うであろう場所で使う事によって、光夜を油断させる事が出来ると考えたから。

そして、凜音の手札にはもう一枚のエフェクト・ヴェーラーが握られている。

厄介なモンスターにたいしてこの2枚目のエフェクト・ヴェーラーを使えば、おおよその場面はどうかとなると考えているからだ。

（それに、いざとなればセットしている2枚のカードを使えば流石に止まるはず。おおよその不知火モンスターの除外された場合の効果は使い終わったのだし、よしとしましよう。）

1ターン目に、可能な限りの妨害カードを構えていた凜音。

先攻で自分の望んだ盤面を作り上げるその引きの強さ。

やはり白皇家の実力は伊達では無いのだ。

「不知火の影者の効果発動。自身をリリースして、デッキから守備力0のアンデッド族チユリーナーを特殊召喚する！来い、《ユニゾンビ》！」

「…やはり来たわね、ユニゾンビ。」

現れたのは、2人組のゾンビ。

名前と見た目にちなんで、効果を2つ備えている強カードだ。

ユニゾンビ、攻撃力1300。

「ユニゾンビの効果発動。ユニゾンビを対象に、デッキからアンデッド族モンスターを墓地に送り、レベルを1つ上げる。」

「…通すわ。」

まだ2枚目のエフェクト・ヴェエラーを撃つタイミングではない。

そう考えた凜音は効果の発動を許した。

すると、ユニゾンビのかたわれは歌いだす。

ガラスを引つ掻いたような、嫌な歌声であった。

「…オーケイ。ならば、デツキから墓地に送るのは…《馬頭鬼》だ。」
「っ！馬頭鬼…！」

光夜がユニゾンビによつて墓地に送つたのは、墓地のアンデッド族モンスターを特殊召喚する強力な効果を持つ馬頭鬼。

これにより、光夜が展開する手段が増えた事になる。

「墓地の馬頭鬼の効果。馬頭鬼自身をゲームから除外し、不知火の影者を対象。特殊召喚する。」

「…通します。」

雑魚の展開を止めるのは無駄な事。

そう考えた凜音はなにもしない。

「…ならば、俺はフィールドの不知火の宮司と、レベル4となったユニゾンビでチュウニング。シンクロ召喚…現世に舞い降りてその力を示せ…《戦神—不知火》!!」

2体のモンスターが炎に包まれる。

やがて、その炎は人の形を成していき、1人の戦士が降臨する。

「素晴らしい召喚口上だわ。…それが貴方の切り札…かしら？」

凜音の言葉に光夜はおどけたようにはにかむ。

「この戦神—不知火は特殊召喚成功時に墓地にあるアンデッドモンスターをゲームか

ら除外して、そのモンスターの攻撃力分、自身の攻撃力を高める。俺が除外するのは、今シंकロ素材にした不知火の宮司だ。」

不知火の宮司の攻撃力を加算すれば、戦神の攻撃力はなんと4500。

青眼を破壊した上で1500ものダメージを与えられる。

だが、

「残念ね。私はリバーズカード《迷い風》を発動。戦神―不知火の効果を無力化するわ。せつかくのカッコいい切り札だけど、残念だったわね。」

ここにきて、凜音はセットされていた迷い風を発動。

戦神の効果を無効にするだけでなく、攻撃力を半減されてしまう。これではせつかくの攻撃力も無駄になってしまった。

「…仕方ない。俺は、手札から《真竜皇アグニマズドV（バニツシャー）》の効果を発動する。」

「っ!？」

唐突に使われたのは、特定の属性を含むモンスター2体を手札、フィールドから破壊する事で特殊召喚出来る大型モンスター、《真竜皇》。

しかも、アグニマズドは炎属性2体を除外して特殊召喚したなら、相手のフィールド、墓地からモンスター1体を対象を取る事無く、ゲームから除外する恐ろしい効果を持つ

ている。

使えるカードを大量に除外されている凜音。

ここはついにセットカードの使い所と決意し、宣言する。

「リバーズカード、《神の警告》！アグニマズドの特殊召喚効果を無効にし、破壊するわ！」

ここまで温存してきた神の警告。ライフを2000消費してしまうが、アグニマズドの出現を阻止。

現在凜音のライフ 6000。

「……ふふふ、少し危なかったわ。ここまで私を戸惑わせたのは褒めてあげる。でも、これ以上戦えるかしら？」

余裕の表情を見せる凜音。

セットカードは無くなってしまいはしたが、優位なのは自分だと確信出来ているからだ。

「……なら、俺は手札から《強欲で貪欲な壺》を発動する。」

「そのカードは……！」

強欲で貪欲な壺。効果は、デッキからカードを2枚ドロウする強力な効果。

その代償としてデッキの上から10枚ものカードを、裏側で除外してしまう。

必要なカードが使用不能になってしまう可能性はあれど、『その先』へと光夜は走り抜ける。

「2枚、ドロー…よし！」

「っ!？」

少し険しい表情をし続けていた光夜。

ドローしたカードを見て、笑顔になった。

ここまで封じたのにも関わらず、楽しそうに生き生きとしたその顔を見て、凜音は心穏やかではいられない。

だが、

（くっ…いい、いえ。何をしているのよ）

白皇 凜音…貴女は負けないのよ…!こんな、こんな名もない、ただ引きが強いだけでしか無い雑魚相手にいつまで振り回されているの!…まだ私には手札にもう1枚の《エフェクトヴェーラー》がある!彼が次にやりそうな事は…)

流星は白皇家の一人。

今まで光夜に振り回されていた自分を戒め、正し、かつ次の光夜の行動を予測する。

「続けて、手札から《異次元からの埋葬》!

ゲームから除外されている《馬頭鬼》《妖刀―不知火》《不知火の武士》を墓地に戻す
！」

「やはり異次元からの埋葬…」

凜音の予想していた通り、光夜は異次元からの埋葬を使用してゲームから除外されているモンスターを墓地に戻した。

「そして、墓地に存在する馬頭鬼の効果。不知火の武士を墓地から攻撃表示で特殊召喚！そして墓地に存在するユニゾンピをゲームから除外し、不知火の武士の効果！自身の攻撃力を600ポイントアップする！」

不知火の武士はその効果を使えばレベル4にしては高いステータスになる。

だが、それ以上に恐ろしいのは、戦闘を行ったモンスターを除外する事。

いくら耐性を持っている今の凜音の青眼達も、その効果の前にはかなわない。

そのため…

「読めていたわ。手札からエフェクト・ヴェーラー！不知火の武士の効果、無効にするわ
！」

起死回生にも見ええさせつかくの効果を無効にされてしまう。

凜音の手札、セットの妨害カードは無くなってしまうが、耐性とステータスの高い

モンスターを2体従え、

俯く光夜。彼を責める者は誰もいなかった。

よく頑張った。

誰しもが彼の健闘を称えていた。

というよりも、同情していた。

「くっ………」

「ふふふ、とうとう観念したみたいね。よく頑張ったわ。この私の守りをここまで崩そうとするなんて対戦相手はとでも珍しいの。でもね、これが事実。同世代ど私を倒せる人なんて、数える程。貴方程度ではお役ごめんよ。」

思わず笑みを浮かべつつ、光夜を蔑む凜音。

もう、彼女の中では彼とのデュエルは終わっていた。

だが…

「くくく…ははは…はははははははは!!」

「!?」

唐突。

いきなり大笑いし始めた光夜。

ざわめく野次馬達、憤る凜音。

「あ、貴方を笑っているの!?この現状でこれ以上何が出来る?!」

そう、光夜は手札もフィールドも、デッキもほとんど残っていない。

現状、不知火ではこの場を返すのはとても難しいだろう。

そう、『不知火』だけならば。

「…あんた、俺の何を見ていたんだ？流石に4枚もの妨害を抱えてるのは俺も驚いた。でもな、俺はまだ『本当の切り札』つてのを見せていないんだぜ？」

「!!??」

光夜の言葉に、一同騒然。

てつきり切り札は戦神―不知火か、その後に出現しようとしていた真竜皇アグニマズドVだと、一同は思っていた。いや、思い込まされていたのだ。

「う、うそ…ここから先に何を…？」

凜音はただ、恐怖した。

目の前にいる男は、確かに無名なのだ。

それなのに、名高き白皇家の、それも天才と言われた凜音ですら、実力の底が見えない相手が、確かに目の前にいるのだ。

「見せてやるよ白皇お前の『知らない世界』をな…俺は、フィールドの戦神―不知火と、不知火の武士2体を墓地に送る！」

「っ！2体を墓地に!？」

せつかくの不知火モンスター2体を墓地に送る光夜。

もつたないが、これはその『先』へと歩みを進めるための犠牲。

「…来たれ…数多の贄を糧とし、我が手に暴力的なまでの勝利を…！完膚なきまでの勝利を！現れよ…《破壊竜―ガンドラ・ギガレイズ》!!!!」

黒き、幾多もの鎖に閉ざされた門。

けたたましい咆哮と、遠くの観客の心臓にすら響く、扉を叩く音がそれぞれ三度。咆哮と叩く音が響く度に扉は壊れていき、三度目に、扉は吹き飛ばされる。

そして、身体中に赤く光る珠がおびただしい程装着されている黒き竜が、降臨した。

4話へ決着。その果てへ

「へ、これが…ガンドラ…なんて禍々しい…」

破壊竜ーガンドラ・ギガレイズ。

攻撃力は0だが、爆発的な攻撃力、破壊力を秘めたモンスターである。

その禍々しきオーラは観客だけでなく、凜音すら圧倒し、呼吸する事を度々忘れてしまう程に威圧感を撒き散らしていた。

そのソリッドビジョンとは思えない程の迫力。間違いなく《本物》である。

しかし…

「ふ、ふふ…でも貴方、やはりだめだめね。ユニゾンのデメリット効果、忘れているのかしら？」

そう、せつかく出したにも関わらず、今現在、破壊竜ーガンドラ・ギガレイズは攻撃出来ない。

それは、ユニゾンの効果のデメリットである、「この効果の発動後、ターン終了時までアンデッド族以外の自分のモンスターは攻撃出来ない」という制約。

どれだけ威圧感があろうと、凜音からすれば「鎖の付けられたままの犬」である。

「…だが、この攻撃力を越える札は無いだろうか？」

「ええ。次のドロウで返せなければ、私は守るのみ。」

でも、私は神に愛された者。そのモンスターを対処するカードくらい、引いてみせるわ。」

それは虚勢でも無ければ願望でも無い。

次のドロウで必ず引くという、自信であり事実。

「…ならば、破壊という手段。封じさせてもらう。俺は墓地に存在する《妖刀―不知火》の効果を発動！戦神―不知火と共にゲームから除外する事で、アンデッド族シンクロモンスターを特殊召喚する!!」

「くっ…異次元からの埋葬だからこそね…」

本来、妖刀―不知火の効果は墓地に送られたターンには発動が出来ない。

しかし、異次元からの埋葬は「墓地に送る」、ではなく「戻す」。墓地に置く方法が異なれば処理も異なる。

このルールの裏についてこそ、デュエリストとしての実力の高さを証明する事になる。

「燃えよ魂。遠き過去より紡いだ力、現世に舞い降り我が道をその炎で照らせ！《炎神

—不知火!!—

光夜の叫び声と共に巻き起こる、フィールドを埋め尽くさんとする程の熱き火炎。神秘的な光を纏いながら、その中から現れるは馬に乗った一人の和風の男の姿。静かで、それでいて儂げな雰囲気纏うその男は、不知火の起源にして頂点。

その攻撃力、青眼の白龍すら振り伏せる。

炎神—不知火の攻撃力、3500。

「炎神—不知火は自分のアンデッド族が破壊される場合、代わりに墓地の不知火モンスターをゲームから除外する事が出来る。」

この炎神—不知火は、墓地の不知火モンスターをコストに、自分のアンデッド族モンスターを破壊から防ぐ事が出来る。

だが…

「…ふう、そうね、ええ凄いわ。でも、先程から私が言っている事が理解出来ないみたいね? そのガンドラは、ドラゴン族であって、アンデッド族ではないのよ。青眼の白龍が炎神に攻撃された所で…?!」

やれやれと首を降りつつ説明し続ける凜音。

だが、途中でふと気づいた。そして、光夜を見た。

光夜は、笑っていた。

その手には、残された1枚の手札。

「あ、あなた…まさか…その手札…」

わなわなと震え、顔面蒼白になる凜音。

観客達も、その自体を理解している者達が多数だったようで、ざわめいていた。現実とは思えない『先』を、予測出来てしまっていたからだ。

「…ああ、そうさ。俺のこの残された手札は！」

「嘘よ！…こんな！…こんな奴に私が！」

「フィールド魔法、《アンデッド・ワールド》!!!」

光夜がそのカードをオープンした瞬間、会場は大騒ぎになる。

なぜならそのフィールド魔法は、フィールド、墓地に存在するモンスターを、アンデッド族へと変更する。

つまり…

「さあ、これで破壊竜―ガンドラ・ギガレイズは攻撃が可能になり！更には破壊を炎神が防ぐ！」

お互いに手札は無く、伏せカードは無し。

モンスターの数も同じ。

それなのに、状況はまるで違う。

この瞬間、白皇 凜音は敗北が決定したのだ。

持てる限りの壁を容易く粉碎されて丸裸にされて、自分なんかよりも圧倒的な実力を
持っている無名のデュエリストによって。

「破壊竜―ガンドラ・ギガレイズは、元の攻撃力は0。しかし、お互いのゲームから除
外されているカードの数1枚につき攻撃力を300アップする！」

「うそよ……ありえない……私が……私が……」

壊れたかのように、凜音は同じような言葉を呟くのみ。

凜音の除外されたカード 15枚。

光夜の除外されたカード 27枚。

合計枚数は42枚。

ガンドラ・ギガレイズの攻撃力……

12600

「さあ、待たせたな白皇！俺のバトルフェイスだ！」

「い、いや……やめて……」

今にも泣きそうな凜音。

だが、光夜には負けられない理由がある。

先へと進むための覚悟がある。

たとえ天から恵まれたような美貌を持つ美少女からの懇願であろうと…やめるわけがない。

「バトルフェイズ！炎神―不知火で蒼眼の銀龍を攻撃!!」

炎神は、馬を走らせる。

そして、刹那。蒼眼の銀龍を通り抜けた。

蒼眼の銀龍は悲しく咆哮をしながら、首を落とされ消滅。

そして、凜音を守るのは、攻撃表示の無防備な、攻撃力たかだか3000程度の青眼の白龍のみ…

「いけガンドラ・ギガレイズーデストロイ・ギガレイズ・バースト!!」

「きやああああああ!!」

ガンドラの身体中に敷き詰められた赤い珠。

その全てが強く輝き、ビームを放ちながら、口からそれよりも広大な熱線を放射。

ソリッドビジョンであるにも関わらず、会場全体を攻撃し、観客達にまで被害を与える。当然会場はパニックだ。

そして、その口から放射された熱線はまっすぐ、青眼の白龍を飲み込んだ。

凜音を守ろうとするかのように翼を大きく広げ、負けじと熱線を放射したものの、そ

れごと飲み込まれ、塵と化す。

凜音のライフ、――1600。「青眼」という攻撃力が自慢のモンスターを使用していたにも関わらず、ただの一撃で凜音は敗北してしまったのだ。

凜音を守ろうとした青眼の熱線が爆発したのか、ガンドラの熱線は進行をやや遅め、熱線が凜音に届く前にその爆発が凜音の身体を吹き飛ばした。

身軽な女の子であり、精神を疲弊して気を抜いていた凜音の身体は宙を舞い、頭から落下していく。

このままでは危ない。

そう誰もが思った時…

ガシッ！

1人の大男が現れ、凜音をキャッチ。おかげで、凜音は怪我一つ無く無事だった。

「えっ、あ、ありが…きやつ！」

ソリッドビジョンが全て消え、凜音が自分を助けてくれた男を見ながら礼を述べ…ようとすると、大男は凜音を降ろし、とっさの事で着地出来なかった凜音は尻餅をついてしまう。

睨み付けてくる凜音を他所に、男は光夜の元へと歩きだす。

「…どうだったよ、俺の初陣は。」

「ほぎけ光夜。人がせつかくくれてやったアグニマズドを罨チエツクのために使い捨てやがって。」

「まあそう言うなよ辰覇（しんば）。裏返せばあれが無かったらしんどかったんだ。とても役に立ったさ。」

2 m 近くはあろう巨軀。

ガタイの良さと表情の固さから威圧感を撒き散らす辰覇と呼ばれた男。

光夜のすぐ前までいくと、仲の良さそうな（？）会話を始める。

「ッ、この私を放置するなんて…なんなのこの人達……」

美少女とチャホヤされるか強すぎて畏怖されてきた凜音に目もくれず雑談し始める2人を見て呆然としてしまう凜音。

と、その凜音の声に気づいた光夜が、凜音を見る。

「なあ白皇。あんたは俺の事を『名も知らない』って言ったよな。それはそうさ。何故なら、俺達は今日に至るまで、大会に出る事を禁止されてたんだからな。」

「「!?」」

大会に出る事が少ない者も、決していない訳ではない。

だが、この遊戯王が盛んな時代において、大会に出て名をあげることをしていないのはかなり特異であり、さらに言えば『禁止されている』というのは引つ掛かる言葉であった。

そして、『俺達』とも。

「そ、それはいったいどういう…」

「それはね、私がそうさせたんだ。白皇家のお嬢さん。」

凜音の背中に向かって声が響く。

現れたのは、眼鏡を掛けた和風の男。

聞き覚えのある声に振り向き、凜音はその男の顔を見て、驚愕する。

いや、凜音だけではない。

観客達のほぼ誰もが驚愕した。

そして、光夜と辰霸だけは、嬉しそうに笑うのだった。

「…やあ、先生。俺のデュエルはどうだった？」

5話～その男、伝説につき～

「やあ光夜。やや無茶しすぎではあるが、素晴らしいデュエルだった。久しぶりに熱いデュエルを見させてもらったよ。それと辰覇も久しぶりだね。また大きくなった。風格が備わってきているね。それと白皇のお嬢さん、お怪我はないかな？光夜が派手にやりすぎてしまったようで申し訳ない。」

柔らかい物腰で、光夜、辰覇、凜音にそれぞれ声を掛けながら歩み寄ってくる男。凜音はその顔を知っている。観客達もだ。

会った事がなからうと、その顔を知らずしてプロを目指す等出来ないだろう。

「な…なんで…どうして貴方がここに…?…獅子神 王牙(ししがみ おうが) プロ…」

そう、この男はかつて、数年に渡って世界の頂点に立ち続けた、正真正銘『世界トップクラスの』プロデュエリストである。

だが、驚かれる理由はそれだけではない。

「おい、嘘だろ…」「獅子神プロ!?えっ、本物!」「近年大会どころかメディアにすら姿見せて無かったはずじゃ!」「えっ、獅子神プロとあの入学生知り合い!」「その隣のデ

カイ奴も!」

ざわめきは収まる事などなく、むしろ騒がしくなっていく。

白皇家の者を一撃の元打ち倒した無名の入学生。

その友人らしき大男。

そして、その2人の知り合いのように接するはかつての『最強』。

話題が尽きる事などないのだ。謎は増えるばかりである。

そんな中、王牙はフィールドの中央へと歩き、辺りを見回して、手を真っ直ぐ伸ばす。

そのしぐさを見て、観客は注目し、静かになっていく。

しばしの静寂の末、王牙は大衆へと向け、口を開いた。

「はじめまして諸君。君たちは私の事を知っているようだね。察しの通り、私の名前

は獅子神 王牙。この学園の卒業生であり、元プロデュエリストだ。」

モニターと、フィールドに内蔵されたスピーカーを通して「元」という一言に、一同

は騒然とする。

確かにここ数年は大会等に姿を見せていなかったのだが、今はプロデュエリストでは

ない、と言っているのだ。

「私がメディアや大会に姿を見せなくなつた事。それによつて行方不明説が噂されて

いた事。全てに理由がある。そして、私は全ての用意を終え、この学園に帰ってきた。

私はね、次の自分となる、後継者。つまりは弟子達を育てていたのだ。そのうちの2人が、ここに立っている、先程のデュエルにてあの白皇家を打ち倒した暁 光夜と、坂本辰覇だ。」

全てが、繋がった。

王牙が姿を消したのは、光夜達を育てあげたため。

光夜達が大会に出なかったのは、「無名を貫き通したまま」王牙直々に、時がくるまで育てられるため。

そして今、王牙率いる弟子達はこの学校に姿を現した。

この世界的にも大スcoopな自体は今、モニターを通してあらゆるメディアへと流れ、ニュースとなっている事だろう。

それを知っているのかどうかは不明だが、王牙は続けて口を開く。

「私の弟子はこの2人だけにあらず。何人いるのかはあえて伏せよう。その方が面白い。そして君たちプロを目指す若者達に告げる。残念ながら君たちの欲する椅子は、既にくくつも『予約』されている。早めに諦める事を勧めよう。」

あまりに大胆な発言。

だが、先程の光夜の見せたデュエルを見るに、どの弟子も『同レベル』なのは明白。自分の夢見た未来を打ち砕かれた者達は、悔しそうに項垂れていく。

「…なあーんだ、プロデュエリストを目指すなんて言つてたような奴等が揃いも揃つてやる前から諦めるのかよ。」

ふと、王牙とは別の声。

それは、光夜だった。

かなり想定外だったようで、王牙も面食らつて光夜を見つめる。

「俺達はプロになる。それは絶対さ。でもな、戦う相手が最初から勝ちを諦めるような連中ばかりの世界なんて、何もおもしろくなんてないね。先生が嫌つたそんなくそつたれな世界なんて。」

はっ、と俯いていた観客達は顔を上げる。

そう、負ける事は当然何度もあるだろう。

相手が格上な事などこれから先何度もあるだろう。

だが、「だからどうした。」

これから先つらくて心が折れる日も来るだろう。

だが、それは戦つてもいい「今」では無い。

それに気づいた者達の眼には、確かに戦いの灯火が燃えていた。

そう、光夜は皮肉を言いつつも、観客達の心に火を付けたのだ。

自分の強力なライバルを増やす結果になろうとも、自分が負ける事が起こらうとも。

理由はおそらく、ただデュエルを「全力で楽しむ」ために。

それに気づいた王牙は、思わず笑みを浮かべる。

弟子の、大きな成長を感じ取れたからだ。

「…まあ、弟子の中でも『最底辺』の俺に勝てないと思うようじゃ結局プロなんて無理だと思うけどな！」

自らを『最底辺』だと言って退ける光夜に観客は一喜一憂。そしてその『最底辺』に完膚なきまでに負けた凜音は絶句する。

(…なあにが最底辺だよ。爆発力なら俺達の中でもピカ一のくせに。まあ、連中を焚き付けるためにはその発言が良いのかもしれないが。)

辰覇は光夜の考えを読み取る。

辰覇は光夜とは長い付き合いだ。彼の皮肉を込めたメッセージの真意等、読み取る事は容易い。

「…さて、これにて私の言いたかった事、それと光夜達のデュエルは終わりだ。解散としようか。君たちのこれからを、楽しく見させてもらおう。」

王牙の発言と共に、観客達は帰り支度を始める。

そんな中、ふと光夜は気になった事を王牙に問いかける。

「…あつ、そうだ。先生はここに来たけど、教師にでもなったのか？」

「ん？ああ、そういうえば言っていないなかったかな。私はお前達の住む寮の寮長になったんだ。これから毎日顔を合わせるさ。」

「へえ〜寮長にねえ〜………はっ?!?!?!」

光夜ですら驚愕。帰ろうとしていた観客達もまた振り向き、驚愕。

まさかの発言が、今日は多い。

「えっ、はっ、えっ?!?もしかして『あの』寮の!?!この学校の数ある寮の中でも結構いいところだよな!?!」

「そうとも。あの寮は私のかつて住んでいた所でね。今日正式に私が寮長になった。君たち弟子を除けば、あの寮に住むのは一桁くらいしかない。気楽で良からう?」

王牙は満足そうに笑う。思わぬサプライズに言葉を失う光夜と辰覇。

だが、近くで最高の師匠がいるのだ。悪い事な訳はない。

「…ん〜、まあビックリはしたけど、先生がいてくれるのはうれしい事だな。なら早速寮に行こうぜ。辰覇、先生。」

結局は嬉しさが上回り、ニッコリと笑って喜ぶ光夜。

その笑顔に満足したのか、王牙も微笑み、うなづく。

ふと、光夜は忘れていた事を思い出した。

「あっ、そうだ。白皇、あんたも俺達と同じ寮な。俺の奴隷なんだし。」

「……………えっ？」

6話　此処が我等の拠点となりて

「……来てしまったわ……ここが……『百鍊星寮（ひやくれんせいりょう）』……」

あれからおおよそ一時間。

凜音が光夜に連れられて来たのは、獅子神 王牙一派の拠点、『百鍊星寮』。

この学園に多数存在している寮の中でも、上から数えた方が早い程に敷地面積、建物の規模、外見の水準が高い。また、伝説レベルのプロといつでも会えるとなれば、誰しもが憧れる程の夢のような建物にも見えよう。

……凜音以外からすれば。

「おとといのうちに家具の設置終わらせて優雅に過ごしていたのに……またやり直しだなんて……」

そう、凜音は入学が決まった時点で既に寮が決まっており、そこに前々から家具やらを設置していた。

女子寮故にセキュリティ面もバツチリの最高級の寮にいたのに……

そこと比べてしまえば、どんな寮も霞んで見えるもの。

凜音の表情は、暗い。

「おいやめろよ白皇。そんなどんよりされるとせつかくのきれいな寮も幽霊屋敷みたくなつちまうじやんか。」

そんな凜音の表情を見て、すぐ横にいて正反対に喜びの表情をしている光夜は凜音に抗議。

「あ、あなたのせいじゃない！」

「こつちはデュエル一回に命かけたんだ、ボロクソに負けたあんたもいい加減覚悟決めろつての。さあ入るぞー」

「~~~~!!」

もちろん憤慨し、指を突き立ててプンスカと怒る凜音。

だが、光夜は気にする事なく寮へと足を踏み入れる。

ぞんざいな扱いを受け、凜音は悔しそうにジタジタと足踏みする。が、やや落ち着いたタイミングで辰覇に促され、肩を落としつつ寮へと入る事に。

「ういーつす。暁 光夜帰りましたよ〜つと。」

光夜は寮内に入るなり、そこそこ大きく声を出し、自分が帰宅した事を知らせる。
と、

「やあくやあ大将！随分派手に暴れてくれたじやあくない！入学早々僕より目立つちやうなんて！」

すぐ近くの扉を開けつつ現れたのは、顔に不可思議なメイクを施した細身の男。

左目の下に涙模様、唇は青の口紅、右耳には複数のピアスと奇抜も良い所。

その姿に凧音は思わず目を見開いて凝視してしまいが、他3人は慣れているのかまるで気にしていない。

「おう、良かったろ綺羅麗（きらら）。おかげで戦利品までゲットしたぜ」

光夜が凧音を指差して『戦利品』扱い。

これには凧音もムツとして抗議しようとする。が、

「おーやおやおやーこれは大変麗しゆう戦利品なこと！…僕にも貸していただけますかな？」

「ひっ…」

ニタリ。

凧音の事を異様な表情で笑いながら見つめる綺羅麗なる男。

気持ち悪い。本能から思った凧音は思わず悲鳴にも似た声を出し、両手で自分を抱きしめる。

と…

「だーめだ綺羅麗。これは俺のものだ。変な事するなよ。」

「ふあ…／／／／」

凜音を守るかのように、光夜が綺羅麗と凜音の間に立ち、凜音の姿を隠す。

以外と頼りになりそうなその背中では少しだけ、ほんのすこくしだけカツコよく見えた。

「あ、あかつk」「こいつに好き勝手出来るのは俺だけだぜ。」

前言撤回。というよりも怒り再熱。

少しだけカツコいいと感じてしまった事を恥じ、胸元まで持ち上げた握りこぶしを震わせる凜音。

そのがら空きの背中にパンチでもしてやろうか。凜音が実行するか悩んでいると：

「あー！ー！ー！やー！ー！！」

大声を出しながらパタパタと階段を降りてくる、ミニスカートをフリフリと揺らす可愛らしい子。

そのまま近づき、光夜の胸元へとダイブ！

遠慮する事なく抱きつくその子と、抱き止める光夜に凜音は驚く。

「おう、ただいま心（こころ）。俺のデュエル観たか？」

「もつちろーん！すつごいカツコよかったー！」

見える。心なる子が尻尾を振っているのが。

愛くるしいワンコのようにキラキラした表情で光夜のデュエルについて熱く語る心

は、ふと凜音を見る。

と、

「わあ！かわいい子だ！光夜のカノジョー？」

「か、彼女っ…!?!(なにこの子！顔が近すぎるのだけれど!?!)／＼／＼／＼」
心に両手を握りしめられながら、心の言葉を聞いてあたふたする凜音。

ここまで距離感が近い存在になかなか会った事の無い凜音の心には、ツンツンしてる余裕がないようだ。

「残念だが彼女じゃあ無いさ。ただの戦利品だよ。」

「なっ、貴方私の事なんだと！」

またしても戦利品呼ばわりされて怒る凜音。

貴族としてプライドの高い彼女で無くとも怒るだろう。

だが、

「ダメだよ光夜ー！こんなかわいい女の子にそんな酷い事言っちゃ！めっ！だよ！」
(か、かわいいわねこの人…)

裏表の無さそうな可愛らしい心の振る舞いに、毒気を抜かれる凜音。

「なあゝにがめっ！だよ。女じゃねえんだからもつとシャキッとしろや。」

「あー！ひどいよシンバ〜！僕は僕なんだからいいじゃん！」

「えつ、こ、心さん女の子では…?」

なにやらおかしいな会話が聞こえたような気がして問いかける凜音。
なにやらみんなきよとんとしている。

「ああ…まあ言わないとわからないか。心はな…」

男の娘（おとこのこ）だ。」

「……………えつ…?」

「そうだよー！僕は男の娘！天宮 心（あまみや こころ）！よろしくね♪」

顔の前でピースサインしながらウインクして挨拶ぶつかます心を前に、凜音はショー
ト寸前であった。

なにここの怖い、もう帰りたい。

でもこの子かわいしいしまあ害無ければいいかあ…

等々、凜音の頭の中は意味不明な思考が羅列するだけだった。

7 話く鳴呼騒がしき日常く

「ねえねえ光夜く、せんせーはどこいったの?」

キヤパオーバーして放心してる凜音から手を離し、心は光夜に問い掛ける。コロコロと話の変わる子だ。

「ああ、そういえば挨拶回りするのかなんとか。まあ夜までには戻ってくるんじゃないか?」

「そつかく…久しぶりに会いたかったのにい…」

光夜の言葉を聞いて、心はやや落ち込む。それだけ王牙に会うのが楽しみだったようだ。

「まあ仕方ねえだろ。先生もいろいろやることあるのはわかってたこった。むしろいつでも会えるような場所にいてくれるだけありがてえ。」

落ち込む心の頭に手をやり、諭すのは辰覇。

口ぶりはぶつきらぼうでも、その言葉遣いは優しさそのものだ。

「むく…そうだね。よし!それまでは楽しく待つてよう!この寮を探検しようよ!りんりん!」

「ふあ、りんりん…？つて、ちよつ、まつて！」

「まずはまずは〜！」

気持ちを切り替えた心は、凜音の手を引くとパタパタと走りだし、あちこちへと引つ張り回す。

誰かにそんな事された事などない上に急に不可思議なあだ名を付けられた凜音はあわわしながら付いていく。

戸惑つてはいるものの、振りほどいたりしないことを考えれば思つたより嫌では無さそうだ。

「ふふふ、華がありますねえ。…さて、僕は少し出てきます。では。」

賑やかな2人（主に心だが）を見て楽しそうに笑う綺羅麗は、一言告げると寮を出ていった。

「…あいつ、なにすると思うよ？」

「まあ、なんとなくは予想つくよな…やりすぎなければいいけど。」

なんとなく、綺羅麗がこれからする事を予想している光夜と辰覇は不安げな表情。

「ほんと勘弁して欲しい…悪目立ちなんてしたら先生に悪い…」

「ほんとそれだよなあ…つてうおっ!?!いたのか影善（かげよし）!?!」

いつの間にいたのか。

光夜、辰覇の背後からふと聞こえた声に2人とも驚く。

そこには目を覆い隠しそうな程に前髪の伸びた、影の薄い黒髪の男。目線がうろろうろしていて、挙動不審に見える。

彼は黒崎 影善（くろさき かげよし）。

光夜達とは古くからの付き合いだ。

「あ〜！かげよしい〜！見てみて！光夜の彼女のりんりん！」

「ちよーだ、だから誰が彼女ですか！」

影善を見つけるなり、またパタパタと舞い戻ってくる心。完全に仔犬である。

そして心に引つ張られつつも、心の発言に反論しようとする凜音。…ほぼ無視されているが。

「あつ…光夜に負けた白皇の…」

「〜！う、うるさいわね！いきなり現れてなんなの貴方！失礼よ！恥を知りなさい！」

「…ひでえつすわ……………」

出合い頭に言うべき台詞ではなかったのかもしれない。

光夜から酷い扱いをされてる事が相まってストレスが爆発気味の凜音にかなりの剣

幕で怒られ、影善は悲哀の表情を浮かべ、余計影を薄くする。

「影善も俺のデュエル直に観に来てくれれば良かったのになく。来てくれたのが辰覇だけとかみんな薄情だぜ。」

落ち込む影善の肩を抱きながら、光夜が喋る。

光夜なりの優しさだろうか。

「い、いや……テレビでデュエル観れるのわかってたし……あんな大勢の人がいる所なんて……怖い……」

そう言うとき余計影を薄くしてしまう影善。

気のせいかな、身体が半透明になっているように見えるくらい存在感が希薄になりつつある。

「僕はほんとは行きたかったんだよ！でもさ、みんなが「お前が行くと別の意味で騒ぎになるからやめときなさい」とって止めるんだ！酷くない？それにしてもどうして僕が行くと騒ぎになると思ったんだらう？」

顎に人差し指を当てながらうーんと首を傾げる心。

そりゃあ、こんな可愛らしい見た目の子が実は男で、王牙の弟子だなんていきなり知られても騒ぎになるだけだろう。

「まあいいか。どうせ明日からは嫌と言うほど話題になるんだし。とりあえず部屋

戻るかなあ。」

話を切り、光夜は自分の部屋へと戻ろうとする。

ふと、凜音は気になる疑問が1つ。

「あ、あの…：暁くん…：そういうえば、私はどうしたら…？」

無理やり連れて来られて君の部屋はありません。

なんて言われる訳にもいかない。

凜音は恐る恐る問いかけた。

「ん？そんなの決まってるだろ。俺の部屋。」

「「「っ??」」」

爆弾発言とはこの事だ。

凜音だけではなく影善、辰覇も驚きのあまり口を開けたままポカン。

「おおく！光夜つてば大胆く！」

「ちよちよちよちよつと?!い、いったい何を言っているのかしら!ととと年頃の男女で同じ部屋にだなんてそんな破廉恥な!!!／／／／」

目をキラキラと輝かせて興奮する心。

あわあわと取り乱し、普段は綺麗な白い肌をしているのに、顔を真っ赤にして騒ぐ。

「はあ?何言ってるんだ?先生来るまでとりあえず俺の部屋使えって言ってるだけだ

ぜ。どっちが破廉恥だよこの女は。」

「くくくあ、貴方つて人はくくく!!!」

「おい待て待て待て！落ち着け白皇！これでもこの馬鹿に悪気はないはずだ！落ち着け！な!？」

馬鹿にしながら冷静に突っ込む光夜。

涙目になりながら頬を膨らませ、ポケットから取り出した折り畳み式の櫛を光夜に向けて振り回そうとする凜音。

それを後ろから慌てて抑える辰覇。

そつと距離を取って安全圏に逃げる影善。

楽しそうにはしゃぐ心。

なにこのカオス。

「先程からやかましいぞ。いつまでも玄関になどいないでリビングルームにでも行つたらどうだ。」

騒ぎを聞きつけたようで、辰覇にも劣らない程筋骨隆々の生真面目そうな男が階段を降りてきた。

「ええ!?!ひ、聖（ひじり）生徒会長!?!貴方までここに!?!」

「ああ、白皇女史。先程のデュエルはテレビで拝見させてもらった。堅実ながらも惜

しいデュエルだ。負けたからといって恥では無い。部外者とはいえ、この御剣 聖（みつるぎ ひじり）が健闘を讃える。」

現れたのは、現生徒会長。御剣 聖。

この男、何を隠そう天皇創世学園の創設に携わる貴族の一族の一人であり、凜音ですら格上だと判断している猛者である。

8話～うちひしがれるはチャンスなり～

「おつす聖。しつかり勝ち取ってきたぜ。」

三年生かつ生徒会長を務める聖に気軽に呼びかける光夜に、凜音はたいそう驚く。

「暁くん!? 貴方なんて無礼な!」

「いいんだ白皇女史。光夜とは長い付き合いがある。だがな光夜。見てはいたが危なっかしかったぞ。初日からハラハラさせてくれる。だが、よく勝利した。先生もお目が高いだろう。」

「へっ、し、知り合い…? っていうか先生って…」

「ああ、今まで隠していたが、私は獅子神

王牙の弟子の1人だ。」

「えええっ!?!」

衝撃の事実を叩きつけられ、驚かずにはいられない。

なんせ、会うのが今日が初めてではない2人。

多少会話だったこともある。

が、王牙と関係を持っていたなんて話は一度も無かつたらかだ。

「どうして黙っていたんですか!? わ、私一度も……!」

「それは先生からの頼みでな。光夜達が入学してくるまでは隠しておけと。光夜達が初めて弟子であることを公表する事による、光夜達に対する印象を他者に刻み込むためと、何かあつた際に私も弟子であることを武器の一つにしたいのだろう。」

今ここに居るのは、『覇者』の意思を継ぐもの達ばかり。

凜音は、自分だけが除け者のような感覚に陥る。

「そういえば、ひじりんなんか用あつたんじやないの?」

そんな凜音をよそに、心が聖に問いかける。

「おお、そうだった。先生から頼まれていた事があつてな。白皇女史。君のための部屋への案内と、荷物の運搬の手伝いをしろとの事だ。辰覇、お前の力を貸してくれ。光夜。お前が連れて来たのだ、お前も手伝いたまえ。」

「ほえっ……?」

聖の用事は、凜音の居住のための手伝いだった。

予想外な言葉に、凜音は惚けた声を漏らす。

「まあ、仕方ねえなあ。やるならさっさとしよう。夕飯前には終わらせてえしな。」

「そのまま部屋のもん使えばいいと思うけどなあ……まあ先生に言われたら仕方ないか。」

「ひじりん！僕は？僕は何したらいい？」

「おう、お前は留守番だ。」

「ガーーーーーン!!!」

こうして、凜音の寮引越し作業が始まった。

〜三時間後〜

「……ふう………疲れた………」

あれからどうにか引越しを終え、凜音は脱衣場にいた。

荷物を運んでいる時の、女子寮に男がいる！という目と凜音様どこへ!?という声それぞれがやむことはなく、果てしなく凜音は疲れた。

夕飯の前に汗を流そう。そう思った凜音は服を脱ぎ、浴室へと入る。

横開きの扉を開けると、左右にシャワーが二台ずつあり、奥には大の男6人くらいは余裕で入れそうかなり広い湯船。

男女兼用でここしか風呂場は無いらしいが、風呂に行く事前にしつかり伝えているため、覗きにでも来ない限りは入る事は無いだろう。もちろん、覗いた者は白皇家の力

の限りを振り絞って社会的に抹殺するつもりだ。

湯船は用意はされていなかったが、今日はシャワーでもいいだろう。蛇口を捻り、シャワーを浴びる。

「はあく…それにしても、ほんつと今日は最悪の一日だったわ……あの男おお……！」

シャワーを浴びて身体を流しながら、凜音は今日の事を思い出してはムカムカする。朝出会い頭の時、デュエルをしていた時。この寮へと連れてこられた時。そして、引越しの時。

「まさか鍵を開けたらズカズカ部屋に上がりこんで、あまつさえ干してる下着を掴もうとするなんて…!!」

怒りと恥ずかしさでプルプル震える凜音。

なんとか手に取られるのは防いだものの、完全に見られてしまった事も相まって怒りは収まらない。

「それに比べて聖会長と坂本くんはとても紳士的だったわね…部屋入るのにも一言くれたしダンスも勝手に開かないようテープで止めるなりして気を使ってくれてたし…というか、一人で1つのダンス持ち上げるって怪力がすぎません…? 見た目通りといえ

ば失礼かもしれないけれど……」

いろいろありすぎたのか、ぼそぼそと一人言を溢し続ける凜音。

「はあ……どうしてこうなってしまったのかしら……」

身体を洗いながら、昨日思い描いていたのとはまるで違う今の自分。

気持ちはどんよりと落ち込む。

「……………いいえ、むしろこれはチャンスなのよ凜音……だって、あの王牙プロと、その弟子達と近くにいられるなんて見方を変えれば多くの経験を積める絶好の機会……そうよ、素晴らしい事じゃない……綺羅麗くんと暁くんさえいなければ……」

光夜の事は余程嫌いになってきているらしい。ついでに気味の悪い綺羅麗も。

しかし、気持ちの切り替えは出来たようだ。

「……さーて、お腹も空いたしそろそろ上がりませんか。」

しばらくすると立ち上がり、蛇口を閉めると軽く身体についた水気を払い、凜音は浴室を出る。

「えくと、タオルタオル……」

「おせーぞ白皇！もう飯できて……」

バタン！

と勢いよく扉が開き、イラつきながら光夜が入ってくる。

「えっ……なっ……えっ……」

「あ……ええと……その……」

裸のまま、とつさに最低限を隠して固まる凜音。

高校一年生なりたてとは思えないくらいのプロポーション抜群のその裸体を、生まれ
て初めて同年代の男に目撃されてしまう。

それを見て次第に言葉を無くし、徐々に後ずさる光夜。

そしてみるみるうちに顔どころか全身赤らめていく凜音。

「……」

謝罪の言葉を絞り出し、扉を静かに閉める光夜。

そして…

「……き……きやああああああああああああああ!?? / / / /」

我に帰り、パニックになってしやがみこんで叫ぶ凜音。

「うおお……予想外の一撃……」

扉の向こう、崩れ落ちる光夜は顔を真っ赤に染め、とんでもないものを見てしまった
と身体を震わせていた。

「くそ…見る目変わっちゃまうだろうが………」

騒ぎを聞きつけ、なんだなんだと寮内の人間がバタバタと各自の部屋から飛び出てきたのは言うまでもない…

9 話 〳 期待の星々 〵

「ぐすつ……………ぐすつ……………」

「だから…わぎとじゃなくて…悪かったって……………」

あれからしばらくした後の事。

騒ぎを聞きつけて何人もの人が光夜が座りこんでいた元に駆けつけた。

事情を聞こうにも、取り乱してろくに会話出来ない光夜という世にも珍しい光景を見て、皆はなんとなく事情を察した。

そうこうしているうちに扉が開き、寝間着姿で、普段は艶やかな髪をしているのに今は整えきれしていない、目を真つ赤に腫らしてぐすぐすとすすり泣く少女、凜音が現れた。

凜音がこの寮に来ている事自体は既に伝わっていたが、日中に見られた姿とはまるで違う、か弱い女の子としての姿と、ただただ泣いている彼女の表情に言葉無くす一同。

そして、光夜が何かを言おうと口を開きかけた瞬間、凜音は光夜の頬をフルスイングでビンタ。

身構えていない光夜は吹っ飛ばされ、凜音は少しだけスッキリしたのかふんつ、と鼻を鳴らして歩きだす。

呼び止めようとした光夜だったが、ふと何かを思い出したのか顔を真っ赤にして黙りこんでしまい、なにも言えず仕舞い。

結局、最悪な雰囲気のまま、夕飯の時間になった。

「そんな事言ったつてすぐ許せるわけないじゃないの。ねえ凜音ちゃん？」

「ぐすつ……………ふぐつ……………うう……………」

広間に備え付けられたソファにて、光夜と凜音の間に座り、仲介しているのは虚渦涅槃（うろうず ねはん）。

この学園の卒業生にて、この寮のお世話役であり、オカマである。

豊富な人生経験を持つため、相談役としても優秀。

なので、今回の騒動の仲介を行っている所だ。

普通の男よりも大幅に話しやすいのか、凜音は涅槃の服をちよいとつまみ、そばにいてくれアピールをしていた。

「光夜つてばほんとデレカシーないよね。普通女の子がお風呂入ってる時にノックもしないでとつげきなんてしないって〜。」

柔らかくも光夜を咎めるのは心。

凜音の隣に座って凜音の頭を撫でて慰めているのだ。

「そんな事言ったつてよ……………」

凜音におもいつきり叩かれた頬を氷水で冷やししながら、なんとか言葉を絞り出して反論しようとはする光夜。

だが、それ以上の言葉は出てこない。

「女心つてものがわかつてないねえ。うちの大将は！風呂場覗かれて許してくれるのは好感度マックスでも難しいって！」

「うるさいな雷兎（らいと）……………」

涅槃に変わって料理をテーブルに並べている何人かの1人、天童 雷兎（てんどうらいと）はおちやらかした様子で一言。

軽々しく痛い所を突かれ、ぼそつと言い返すくらいしか今の光夜には出来ない。

「まあ、すぐに仲直りしろとは言わないが、いつまでも険悪な雰囲気ばかり出すなよ2人共。これからせつかくのパーティーだと言うのにいまいち盛り上がりだろ？」

静かに、明確に諭すは聖。

貴族かつ生徒会長。真面目な彼ではあるが、パーティーは楽しくしたい様子。

「まったく、王牙プロの弟子どもはやかましい奴らだよ……自信に満ちてて羨ましい限りだね、くそつ……」

既に盛られたポテトをつまみながら僻む痩せ細った目付きの悪い男。名を雪咲 花

道（ゆさき はなみち）。2年生。

この寮において数少ない、『王牙の弟子ではない』者の1人だ。

元々この寮に住んでおり、王牙が（名前を隠していたとはいえ）出ていくように通達していたにも関わらず、一年も住んでいたのだから今さら出てなどいくものかと王牙の要請を断り居座っている。

そのわりには王牙の弟子達が気にくわないらしく、僻み妬みを溢している。

「ほんとだわなあ…まあ、俺は楽しければそれでいいんだけどね?」

どこか遠い目をしながら騒いでる弟子達を眺めるのは、同じくこの寮に元からいる2年生の海原 水面（うなばら みなも）。彼も弟子では無いが、花道よりは楽観視しているようだ。

「お前はほんといい性格をしているよな水面。」

「だってなあ、こうなるのはなんとなく予想出来たわけだし。まあ俺らもうまく付き合うのが一番だよ。」

「…簡単に言ってくれる。」

「そりゃ無駄に敵対するよか簡単だからな!」

あつけらかなと言つてのける水面は、料理を運ぶ弟子達と気軽に話し始めた。

気楽で羨ましい奴だと、花道は深くため息をつくのであった。

そして話は戻って光夜達。

多数に慰められ、心に髪をとかされていたおかげで凜音は少しずつ落ち着きを取り戻していた。

「大丈夫かしら？ さつきよりはだいぶ良い表情になったわね。」

「ええ、ありがとうございます。虚渦さんと心さんがいなかったら、私多分男性恐怖症になっていました。誰かのせいで。」

光夜を睨み、ムスツとしながら恨み言を吐き出す。

流石の光夜もたじたじであり、目を泳がせるばかりだ。

「いや……ほんと……申し訳ない………」

「次やったら貴方を社会的に二度と日の目を浴びれない目に合わせてあげるんだから。覚悟なさい！ ふんっ！」

ズビシッ！と人差し指を光夜に突き立てて宣言し、そっぽを向いた凜音。

どうやら今回は一応許してもらえたようで、光夜、またはその周囲もほっと一息。

「おやおや、どうやら話は終わったらしいね。それでは気を取り直して食事といこうじゃないか。」

いつの間になっていたのやら、獅子神 王牙がグラスにワインを注いで席についていた。

心なしかそわそわしているようにも見える。

「げっ、いたのかよ先生……」

今いてほしくなかった……

そう言いたげな光夜は苦虫を噛み締めたような表情。

「まあね。私も腹が減った。さあみんな集まりたまえ。」

王牙の言葉を受け、みなそれぞれ席に座り、グラスを手に取る。

「まずは私からいくつか……」

光夜、辰覇、綺羅麗、心、影善、雷鬼。入学おめでとう。そしてようこそ、我が母校へ。我が寮へ。」

「聖。私の頼みをよく守り、そしてなお私についてきてくれている。嬉しいよ。」

「それと、私の要請を受けてもなおこの寮に残った君達には礼を言おう。君達の存在は私の弟子達にはとても良い刺激になるだろう。そのまた逆も然り。是非仲良くして欲しい。」

「涅槃。また私を助けてくれ。そしてこの皆を助けてあげてくれ。君がいるのはとても心強い。」

「そして最後に凜音くん。光夜がバカをやったらしいが、許してくれてありがとう。出会いは最悪かもしれないが、君もここにいてる事で数々の経験を積む事が出来るだろう。私もなるべくここにいてる。迷わず私達を頼りなさい。」

「さて、長くなってしまったな。他にまだここにいない者達もいるが、とりあえず私から言いたい事はだいたい終わつた。光夜。何かあるかね？」

今ここにいるそれぞれに言葉を述べた王牙は、光夜にバトンを託す。凜音や花道に訝しげな目を向けられるも、こほんと軽く咳払いをした光夜は、その口を開く。

「ああ…俺達は確かに先生の弟子で、先生についてきてようやくここまで来れた。でも、それはあくまで土台であり、ここからがスタートだ。この寮を出れば敵だらけ。この寮の誰かだつて敵になる。」

(それはそうだわ。私は貴方の仲間ではないもの。)

光夜の最もらしい発言に、心の中で同調する凜音であつた。

「俺達は、必ずプロになる。そして先生と同じ世界に立つ…だけじゃない。俺は、俺達は、先生を越える。」

光夜の決意に満ちた目と発言に、凜音、花道は飲まれそうになり、弟子達は力強く頷く。

そして、王牙は満足そうに微笑んだ。

「…まあ、まずは食べようぜ。俺達弟子ではない先輩方も。これから先何度も顔を合わせる仲間なんだ。仲良くしてくれ。なっ？」

ふと雰囲気を緩め、花道、水面に笑顔を向ける光夜。

水面はそれを笑顔で返し、花道はふんつ、と鼻を鳴らす。

「…それじゃあ、俺達のこれからに、乾杯！」

光夜がグラスを掲げて乾杯を告げると、皆それに習って同じくグラスを掲げて乾杯と返す。

そして、騒々しく食事が始まるのであった。

10 話 宴の終わりは静寂と余韻に包まれる

乾杯の後の食事は、それは賑やかなものだった。

盛り上げ役に徹する水面や心、話上手な涅槃等が率先して話す事で退屈そうにする者は少なかった。

やや遅れて現れた寮生達も食事に加わっていき、より賑やかに。

ある程度食事が終わった頃から自己紹介をし始めたり、王牙、涅槃の昔話に皆揃って耳を傾けたりと、とても優雅な時を過ごしたのだった。

そして、今はそれから数時間後の深夜。

大半が寝静まった時間帯に、光夜は一人寮内を歩いていた。

それは、王牙に自室に来るように言われていたためだ。

他の者は呼ばれず、ただ一人だけ呼ばれた光夜。

なんで呼ばれたのか、薄々感づいてはいるが、確証は持てない。

少しばかり不安な気持ちを胸に、王牙の待つ部屋へと向かう。

「先生、俺だ。光夜だ。」

ノックをして、静かに呼び掛ける光夜。

そう遠くない部屋には涅槃や他の寮生もいる。なるべく気づかれないように配慮をしている。

「やあ光夜。さあ、入りなさい。」

「うす。邪魔するよ。」

いつもと変わらず、優しく、ただしやや声のポリウムは抑えた王牙に促され、光夜は部屋へと入る。

「すまないね、疲れているだろうに。コーヒーでも淹れようか？」

「いや、大丈夫だよ。それよりなんの用？」

王牙に招かれるままに椅子に座り、用を尋ねる光夜。

問われた王牙は自分のコーヒーを淹れると、自分の椅子に深く座る。

「いやなに、入学当日に二人きりで話したくてね。本当におめでとう。誰一人落ちる事なく入学した事、心から喜ばしいよ。」

王牙は本当に嬉しそうに微笑む。嘘一つない正直な気持ちを、光夜に告げている証だ。

「まあ、何人か怪しいのはいたけどな。それでも皆で目標のために頑張ってきたから、ここまででは来れたよ。先生に導かれなかったら、多分俺達は誰もここにいなかった。ほんとに、感謝ばかりさ。」

光夜も、嘘一つ無い正直な気持ちを吐き出す。

普段の皮肉屋としての側面は無い。

「…君達と出逢い、弟子として鍛えるようになって早5年程か。本当に皆大きく育った。」

王牙はコーヒを一飲み、懐かしさを吐息に込めるよう、深く息を吐く。

その眼には、今は何が映っているのだろう。

光夜にも、それはわからない。

「…なあ、先生？」

「…ん、どうしたんだい？光夜。」

一息置いてから、光夜は真面目な表情をして問いかける。

それは、光夜が気になっていた事。聞かなければならないと思っていた事。

「…どうして俺に、『白皇の娘を焼き付けてこの寮に住まわせろ』なんて命じたんだ？いや、多分ある意味適任なのは俺だろうとは思ってたけどさ。」

凜音を挑発して、奴隷扱いとしてまでもこの寮に連れてきたのは、なんと王牙の指示のもとだった。

光夜はうまくやり遂げたものの、やはり疑問は尽きない。

「…それには理由はしつかりとある。白皇家の者、それも才覚あるものは大抵プロに

入る。彼女の兄2人もそうだね。実力だけなら世界でも上から数えた方が圧倒的に早いだろう。特に長男。彼は全盛期の私と同等。もしくはそれ以上の才覚がある。白皇家とは、そういうものだ。彼女、凜音も、磨けば同じ域にまで到達するかもしれない。王牙から説明されるは、白皇家というものの一族の凄さ。

だが、それだけではない。

「しかし、彼等は世界の頂点に立つ事はおそらくないだろう。あまりにプライドが高い事。自分達の世界を守り過ぎる事が大きな要因さ。そして、凜音は兄2人に勝てないと、どこかで思っている。見ている世界が狭いからだ。私はね、彼女も弟子として迎え入れたい。彼女は嫌がるかもしれないが、君達の身近にいてもらう事で、自分の殻を破って欲しかったのさ。」

白皇家の者や、他のプロ達と何度もぶつかりあってきた王牙の発言。光夜にはピンと来なくても、わかる事はある。

その言葉に、嘘はないと。

「なるべくは穏便に仲良くなつて欲しかったのはある。…しかし、君が嫌われてしまいかもしれないとは思っていたが、まさか風呂場を覗いて頬を腫らす程叩かれるとはね。くくく…」

「うっ、そ、それは事故だから…つたく、だからこの人に知られるのは嫌なんだよ…」

堪えきれずに笑い声を漏らす王牙を前に、嫌そうな表情をしながら顔を赤らめる光夜。

浴室での光景を思い出してしまったのだろうか。

「…それで、嫌われ者を演じて、なるべく距離を保とうとしていたのに彼女の裸を見て意識してしまっている光夜君？」

「うぐっ！そ、そういうのやめろって！調子狂うからさ：／／／／」

せつかく意識しないようにしているのに、再三に渡って弄られる。

相手が相手だけに強く出る事も難しく、光夜はたじたじだ。

「君から見る白皇 凜音は、どう見える？」

ふと、真剣な表情に戻る王牙。

その問いは、何を求めるのか。

「なんだよ急に……まあ、漫画のようにコテコテのお嬢様タイプって感じだった。

…最初は。
ただ、心と接していくうちに、氷が溶けたみたいに、表情や雰囲気は柔らかくなってきたるように感じたよ。案外普通の少女、って感じだ。

ただ、なにかを恐れてる…？負ける事か、何かに襲われる事を。」

なんとなく、気になったような事を呟く。

おそらくは気のせい、もしくは少女という目線からは普通かもしれない。

だが、気になった事をなんでもいいから教えて欲しい。

そう王牙に言われているように感じる光夜は、あえて口にしていく。

「…なるほど。君の目は信じるにとても値する。」

「そんな事ないって。なんとなく思った程度だぜ?」

「女性には不馴れなくせに、何度も告白された君がよく言うな?」

「げっ、なんで知ってるんだよ…」

「君が話さなくても、他の者がしつかり教えてくれるからね。実は女性には気さくで優しいとか、下ネタはやや苦手な部類だったりとか。中学時代はフアンクラブまであったそうじゃないか?」

「ぐうう…心と辰覇だな…後で仕返ししてやる…」

王牙がぺらぺらと発言していく内容を聞き、復讐を誓う光夜。

「ふふふ、おっと、口が過ぎたようだ。いやあ、君はとても弄り甲斐があつてね。やり過ぎた事を許してくれたまえ。」

「ほんとに謝る気があるのかこの人は…まあいいけどさ…」

楽しそうにしている王牙を見て、呆れた風に愚痴る光夜。今日は散々な日である。

「…さて、君達は私の弟子として入学した。明日からはもう無名な一般人等ではなく、

狙われる立場になつてゐる。これからは君達が君達で強力しあい、しのぎ合い、乗り越える事になる。私は側にいるとは言えど、してあげる事はないだろう。いつまでも自立しないのでは、育ててきた意味もないからね。」

王牙はそう告げると、手に持つてゐるコーヒーを飲み干す。

「…そろそろ時間も遅い。部屋に戻つて休みたまえ。明日から、頑張りなさい。」
王牙は、光夜に部屋へと戻るように促し、立ち上がる。

と…

「…俺はさ、先生。あんたにまた会えたのは嬉しいよ。でもさ、あんたが側にいようがいまいが、やる事は変わらないんだ…あんたを越える。それだけ。」

光夜の強気な発言。

それは王牙を驚かせるが、それと同時に喜ばせた。

王牙からすれば、花丸付きの百点の答えだろう。

「…さあ、戻りなさい。凜音のすぐ隣の自室まで」

「だからそういうのやめろつての!!／／／／／」

からかわれ、声を上げながら光夜は出ていった。

「…ほんとうに、楽しみだよ。君達のこれからが。」

光夜が去つた後、王牙は一人静かに眩き、就寝の用意を始めるのであつた。

11話～目覚め～

「んん…朝かあ……………ふわあああああ……………」

朝が来て、凜音は目を覚ます。

今は6時をやや過ぎた頃。目覚ましよりも早くは起きたが、普段からすれば遅めの起床だ。

大きくあくびをしながら体を伸ばし、気持ち切り替え立ち上がる。

顔を洗うための道具を揃え、凜音は部屋を出る。

「うーん、今日はまだ眠いわね…昨日がいろいろとありすぎたからかしら…」
いまいちスツキリしない様子で、何度かあくびをしてしまう凜音。

昨日の激動っぷりを考えれば、疲れが残るのも無理はない。

2階にある自室から洗面所へは階段を降りる必要があり、凜音はその道を歩きながら今日の予定等を思い浮かべつつ、洗面所へと向かう。

寮内にはうるさくない程度にクラシック音楽が流されており、起きたばかりの凜音にとても心地よかった。

また、キッチンからは朝食を準備しているのか香ばしい香りが漂い、凜音の体をより

目覚めさせる。

一歩歩く度に目を覚ましていく。

そんな感覚にやや胸を踊らせて、凜音は階段を降りた。

「おや、おはよう凜音君。朝早いんだね。良いことだ。」

階段を降りた先にて、凜音に声を掛けた人物。

それは、この寮の長たる者、王牙であつた。

手には空のマグカップを持つている事から、キッチンにでも向かう所だつたのだから。

「おはようございます王牙プロ。ええ、親から自立した生活をと言われ続けていますので。」

「私はプロではないよ。親しみを込めて先生と呼んで欲しい。」

「…では王牙プロ、また後程。」

ややそっけない態度を取り、王牙から離れていく凜音。

「困つた子だ」と王牙は苦笑いし、キッチンへと向かう。

「何故かしら…私、王牙プロをあまり好きになれないのよね…」

理由は定かではないものの、何処と無く好きになれず、そっけない態度を取つた事を少しばかり後悔する。

まあ、昨日あれだけ自分から尊厳を奪い取っていった光夜の師であり、光夜を高く評価ばかりしている王牙をいまいち好きになれないのも領けはする。

首を振り、気持ちを切り替えた凜音は洗面所の扉を開く。

「ん?…おお、白皇か。朝早いんだな。」

「えっ、はっ?…!?はわわ?…!?!」

そこにいたのは、上半身裸の光夜であった。

頭にバスタオルを被って髪の毛を拭いている所から、風呂上がりなのだろう。

引き締まった上半身を目の当たりにして、凜音は顔を赤く染めて固まっている。

「…どうした?…なんかおかしいか?」

固まる凜音の視線が自分に向いているのを感じ、光夜は自分の身体を見回す。

「ご、ごごごごめんなさい!私ったらノックもせず!」

はっ!と我に返るなり頭を深く下げて謝り出す凜音。

光夜は意味不明と言った表情だ。

「は?いや、男つてのは上裸見られた程度で気にしねえつて。それより顔洗いにでも

来たのか?」

「はえっ!?!え、ええ!その通りです!」

凜音はいそいそと、1つ間を空けた洗面台に備えてある椅子に座り、手際良く顔を洗

始める。

女性の身だしなみというものをあまり身近で見たことのない光夜は興味こそあれど、昨日の今日でなんとなく気恥ずかしく、なるべく凜音を見ないようにと、ドライヤーで髪を乾かし始める。

お互い無言のまま。

なんとも気まずいが片方は洗顔中、もう片方はドライヤーを起動中。話しかけるのも気まずい。

が、

「…あつ、そうだ。頼みがあるんだけど。」

「…何かしら。」

ドライヤーを切り、光夜が声をかける。

丁度顔を流し終えた凜音は、タオルで顔を吹きながら光夜を睨み、警戒した様子で答える。

「あんたの部屋の向かいに心の部屋があるんだけど、戻り際起こしてくれないか？あいつ朝弱いんだよ。」

「…何故私が？貴方も近いじゃない。私の隣なのですから。」

そう、この2人、部屋が隣同士なのである。

男女で区別されている訳ではないので仕方はないが、最初その事を知った時の凜音の取り乱しっぷりはそれはもう凄かった。

「男の人がすぐ隣なんて嫌！しかもよりもよって暁君だなんて！」と喚き、鍵を閉めればいいという光夜の発言によって「そういう事じゃない!!」とよりいつそう喚いていた。

「この後朝食の手伝いしないといけななんだわ。あいつ身だしなみに時間かかるから早めに起こさないといけなくてさ。」

「…仕方ないわね、良いでしょう。起こしてきてあげます。心さんのために。」

そう言うなり、凜音は立ち上がるとスタスタと出ていった。

「…ずいぶん嫌われたなお前。」

ガラガラと、扉を空けて浴室から姿を現したのは辰覇。

どうやらいつ出るのか様子を伺っていたようだ。

「おう辰覇。なんでずっと上がって来なかつたんだ？ずっと湯の中にいたらのぼせちゃうぜ。」

光夜が新品のバスタオルを辰覇に投げ渡しつつ問い掛ける。

「馬鹿野郎。お前の上裸見て取り乱すような女がいたんだぞ？素っ裸の俺が現れてみる、俺まで嫌われちゃう。」

「そう言い返ししながら、辰覇は濡れた身体をバスタオルで拭いていく。筋肉隆々。たくましいその身体はとても高校一年生とは思えない。」

「なんだよ辰覇。お前白皇に好かれないのかよ?」

「あんな美少女にわざわざ嫌われても得なんかあるものか馬鹿野郎。それに『あの』白皇家の人間だから尚更だ。お前ももう少しうまく行動しろ。痛い目見るぞ。」

「うまく、ねえ…」

辰覇の最もな言葉を受け、光夜は口を紡ぎ、部屋を後にするのであった。

「…まったく、アイツもまだまだガキだな。さて、俺も手伝いに行つてやろうかね。」

1人残った辰覇も、朝の用意のため、少し急ぎ目に支度を始めるのであった。

1 2 話～幕開けの鼓動～

「…およ、凜音ちゃん！朝早いんだね〜？」

自室へと戻ろうと歩き、階段を昇ろうとした凜音に声をかける人物。

雷兎であつた。

うつすらと汗をかき、タオルやらを手に持つている様から、これから朝風呂なのだろうか。

「あら、おはよう天童君。貴方は…朝から汗をかいているのかしら？」

やや馴れ馴れしい雷兎の事が苦手気味な凜音ではあるが、世間話くらいはと言葉を返す。

これが関係ない立場なら我関せずも出来るが、同じ寮に住む同士。

無駄な争いは早々起こしたくはないのである。

「まあね〜。朝は起きたら筋トレしてんのよ。辰覇までとはいかずとも男らしい肉体欲しいじゃん？」

そう言いながら、雷兎は手ぶらの左腕に力こぶを作り、ニカツと笑う。

「くすくす、天童君も十分筋肉付いてると思うわよ？私としては天童君くらいの身体

の方がカッコいいと思うわ。」

「えっ!」

「じゃあ、またね。」

不意に褒められて戸惑う雷兔をよそに、凜音は階段を登っていく。ふと見せた笑顔、その可憐さに雷兔の心に電流が走る。

「うわっ、めっちゃかわええ…惚れる…」

惚れっぽい性格の雷兔。

その姿が見えなくなるまで、凜音を眼で追ってしまっていた。

「…ふう、さて、早く起こさなきゃ…」

手荷物を自室に置き、凜音は心の部屋の前に。

扉には『こころのへや』と書かれた動物のネームプレートがぶら下がっており、ほんとに男なのだろうか?と凜音は疑うしかない。

自分よりも女の子らしくある心という存在にややもやもやした気持ちを抱きつつ、凜音はドアノブを回して部屋へと入る。

「心さーん?起きてるかしらー?もう朝ですよー?」

心に呼び掛けつつ部屋の奥にあるベッドへと歩みを進める凜音。

どこを見てもメルヘン、ファンシー、プリティという言葉が似合うような可愛らしい

部屋。

大きくフカフカそうなベッドには動物のぬいぐるみがいくつも置かれ、その中にピンク色のもふもふしたウサギのぬいぐるみを抱きしめて眠る心の姿を発見。

(うつ、か、かわいい……！なにこのかわいい生き物？！)

そのあまりの可愛さに思わずスマホを取り出して写真を撮ろうとする凜音。
シャッターを押す寸前になってはっ、と我に返る。

(い、いけないわ凜音！相手の許可も無しに写真を撮るなんて盗撮じゃない！で、でもかわいい……！)

その可愛さの前にキヤラ崩壊を始める凜音。

ベッドの側まで近づき、心の寝顔を眺める。

「……………はっ！起こさなきや！心さん！起きて！もう朝よ！」

ぼーっと眺めて数分。

ようやく我に返る事が出来た凜音はベッドに上がり、心を揺すつて起こす事に。

「ん………ん………」

揺すられてもグズる心。起こすのはとてもはばかられる。が、早く起こさねば自分も時間に余裕が無くなる。

意を決して再度起こす。

「起きなさい天宮心！貴方もう高校生なのよ！シャキツとしなさい！」

「ほえっ!？」

凜音の活の入った声に驚き飛び起きる心。

ようやく起きた…と凜音は安堵する。

「んう〜…？おはよお〜……………」

クシクシと目を擦りながら、気の抜けた声をあげる心。

起きている普段よりも幼げな雰囲気。思わず加護欲を掻き立てる。

「っ…お、おはよう心さん…もう朝よ、起きなきゃっ!？」

「あとごぶくん…」

凜音に抱き付いてまどろむ心。

不意の事に抵抗出来ず、心と一緒にベッドに倒れこむ凜音。

聞こえるのは、心の寝息だけ。

「も、もお〜！心さん起きて〜！私も朝の準備あるんだから〜!!」

「えへへえ〜、あつたか〜い…」

心から逃れようともがく凜音だが、心の掴み方が絶妙でうまく抜け出せない。

「心おー！いい加減起きないと飯抜くぞー…あつ……………」

扉をバンツ！と開けて現れたのは光夜。

どうやら凜音に起こすように頼んでも思ったより遅かったために結局自らやってきたようだ。

が、凜音と心の状況を見て口をパクパクさせ、狼狽し始めた。

「あ、暁くん…」

「そ、その…ごめんなさい…」

狼狽している光夜を見て名前を呼ぶ凜音。

またやつちまったと、光夜はススツと部屋を去ろうとする。

「ふえっ!?ちちち違うの!助けて暁くん!暁くん!!!」

~~~~~

「えへへえ〜ごめんごめん!朝はどうにも苦手でさ〜!」

あれから、凜音のヘルプを聞いた光夜が心を引き剥がし、そのまま洗面所に運んで心の顔に水をかけて起こすという暴挙をぶちかまし、心はようやく完全に目を覚ました。

光夜が心を連れていった後、凜音はどつと疲れた様子で自室に戻り、朝の支度を終わらせて食堂へと降りた。

「もう、全然起きなくて困ったんですから！結局暁君が来るんなら私行かなくても良かったんじゃない？」

「いやまさかそこまで起きないとは思わなくてさ…朝からすまんかった。」

「いえ、謝る程では無いけれど…（心さんのかわいい寝顔見られたし…）」

朝食を食べながら、凜音、心、光夜は会話をする。

既に数人は朝食を終えた、もしくは食べずに寮を出たようで、食事をしているのは10人もいなかった。

「それにしても、夢の中で手に持ったフニフニした感触はなんだったんだろ…？大きくて掴み心地良かったんだよねえ〜」

「ぶふっ!?!」

心がふと発言。

凜音、光夜は吹き出しそうになる。

「~~~~!!こ、心さ〜ん!!」

「ふええ!?!なにになに!?!」

「: : / / / /」

唐突に心を怒号する凜音。驚いて飛びはね、狼狽える心。

何故か顔を赤らめる光夜。

他からすればちんぷんかんぷんだらう。

「まったく騒がしい…テレビがよく聞こえねえじゃねえか…」

騒がしい3人を眺めながら、文句を垂れながらリモコンでテレビのチャンネルを変える辰覇。

と…

『天皇創世学園朝のニュースです。』

昨日、「獅子神 王牙の弟子」を名乗る新入生が、一年生、二年生のおよそ10人に挑み、打ち倒したとの報告が届きました。その新入生の名前は『皚崎 綺羅麗（くるさき

きざらら）』

「!?!」

ニュースから聴こえてきた聞き覚えのある名前。

凜音、花道、水面は思わずテレビに目が釘付けになる。

『新入生の皚崎 綺羅麗は左腕に謎の紋章を刻まれた腕章を付け、倒した者達に「この紋章を目に刻み込んでおくといい。これが我々を象徴する証だ」と発言していたとの事で、この紋章を目にしたら獅子神 王牙プロの弟子として注意するように。また、昨日に白皇家の才女、白皇 凜音を入学初日に打ち倒した暁 光夜は獅子神 王牙の弟子



達のリーダー格との事であり、総じて同レベルだとの情報。野良デュエルを持ちかける際は心して人を選ぶように。』

絶句。光夜や辰覇ですら重苦しく口を紡ぎ、光夜は額に手を当ててため息。

(なお、心は食事をする事に夢中でニュースの内容をろくに聞いていなかった)

このニュースは学園に関係する者達に広く知れ渡る。

それは問題ではない。

『入学初日にたった1人が10人ものデュエリストを倒した事』が問題なのだ。

明らかにやり過ぎだった。

前日に光夜、辰覇が予想していた事は、最悪の方向で的中していたのであった。

## 13話〈超天星〉

「いやあ…やってくれたよね…ほんと…綺羅麗は加減つてものがわからねえ…」

数分してから、光夜はボソリとこぼす。

「お前達弟子達は随分と目立ちたがりだな。まあ僕には関係のない話だ。じゃあな。」  
我関せずといった様子で、花道は食器を片付けて去っていく。

「まあ昨日あれだけ光夜君が暴れたんだしこうなるのも遠くはないことつしよ。まあ頑張りなよ♪」

続いて水面も、励ましてはくれるものの他人事の様子で、同じく食器を片付けて去っていく。

「…それで、暁君はどうするのかしら。」

2人が去つてから、凜音が光夜に問い掛ける。

「…んまあ、水面さんの言う通りなんだよな。昨日の時点で俺達は注目の的になるのはわかつてはいたんだ。悪目立ちしちまうのもまあ仕方ない。俺が考えてたのとは多少予定が狂つてはいるけど、後はもう流れに任せるしか無さそうだ。」

そう言うのと光夜は立ち上がり、決意に満ちた目をして、言葉を続ける。

「俺達は逃げない。立ちほだかる奴等は風ぎ払う。俺達は仲良しこよしするために来た訳じゃない。」

プロになるために今までやってきた。それは、これからも変わらない。」  
その決意に満ちた言葉。

同じくその場にいる弟子達は力強く頷く。

(…なるほど。どうしてこの人がまとめ役なのかと疑問だったけれど、こういう所なのかしらね。)

光夜、そしてその他を見て、凜音はそう自分で納得する。

「カッコいいわねえ光夜ちゃん。」

それと、時間は大丈夫？あまりちんたらしてる時間無いんじゃない？」

涅槃の言葉にはっ！と皆で時計を見る。

まだ余裕はあると言えるが、食事を終わらせていない事を考えるならば、わりと微妙な時間だ。

「気合い入れ直せよお前達。先々の事まで考えてこそその我々だ。そんなわけで先に行くだぞ。」

慌てて食事を再開する光夜達に一言告げて席を立つのは聖。

常に規則正しくまともな動きと言動。

しかし、心なしか光夜達の慌てっぷりを面白がっているようにも見える。

「ぷはー！こちそうさまー！よーし、頑張るぞー！」

続いて食べ終えた心が勢いよく立ち上がり、その勢いを保ったままパタパタ走って出ていった。

「あらあら、食器片付けていかなかつたわね。まあ構わないけれど。面白い子ね。貴方達も、今日はそのままでも良いわよ。」

そう言うど涅槃は自分の席を立ち、凜音に近寄る。

なにか用だろうか？と凜音は不思議そうに涅槃を見る。

「貴方の部屋の外にカゴを置いて置いたわ。洗濯したい物をそこにに入れて部屋の中に置いていくれたら私が洗濯して、また部屋の中に置いてあげてあげる。合鍵を持っていくから遠慮なく鍵も閉めていいわよ。あとカゴの中に私の連絡先を書いた紙を入れておいたから、なにか必要な物とかあるならメールなりで教えてちょうだい。この寮に女の子は珍しいから、私で良ければいくらでも頼って。」

凜音の耳元でそつと伝え、離れ際にウインクしてそのまま皿の片付け等をしていく涅槃。

急遽周りに女の子がいなくなった環境で心細かった凜音にとって、何よりも心強い存在である。

「…よし、行きますか。」

食事を終え、自室に戻って用意を済ませたそれぞれ。

光夜、辰覇、心、雷兎。それと自室にいた綺羅麗、影善。

そして最後にやってきた凜音が揃うなり、光夜がその場にいた者達に声を掛ける。

「どうして皆揃っていくのかしら…？」

集合して皆で向かうとの光夜の指示に、疑問を持ちながらも従っていた凜音。

全員が集まってから、その疑問を投げる。

「それはね凜音君。この者達が我が弟子であるという、言わば凱旋なのだよ。」

問いに答えるは王牙。

なにやら箱を手に持ち、光夜へと近寄っている。

「綺羅麗、雷兎は既に受け取っていたが、君達もこれを付けてくれたまえ。」

それは、綺羅麗が腕に付け、ニユースでもあげられていた腕章。

『天』と描かれた周りを囲うように星マークが十三個。

その『天』の文字の背後には獣の鉤爪のような物が隠れている。

「これは…」

「天とはプロの事だ。それと、私を越える、という意味を込めておいた。君達は私の弟子であり、次の星々だ。」

格好付けて『超天星（ちようてんせい）』と呼ぼう。」

「先生…」

腕章を受け取りつつ王牙を見つめる光夜。

そして微笑む光夜。そして…

「いややっぱだせえよ先生」

「な、なんだと!？」

ド直球に文句を言われて驚愕せずにはいられない王牙。

思わず笑いだしそうになる凜音。

「いやまあ言うのもなんだと思っただけどまあ結構中二感あるぞ先生。」

「かわいくなーい!」

「その…派手過ぎるか…」

辰覇、心、影善からも不評の嵐。

がつくしと落ち込む王牙。

「そうですかねえ？僕は気にいっていますが。」

「だよねえ綺麗羅麗？めっちゃカッコいいと思うんだけどなあ〜」  
綺麗羅麗、雷兎は絶賛。

王牙の眼に少し光が戻ったように見える。

「…まあ先生がせっかくな考えたんだし、乗ってやるかあ。ずっと「弟子達」って言われるのもなんか嫌だったしな。」

そう言いつつ、光夜はその腕章を腕に通す。

それに続いて他も腕に通していく。

（心だけはブレスレットのようにはしてない。）

そして、残されたのは、1つだけ。

「あれ？これは誰の分だ？」

「これはね、凜音君。君の物だ。」

「ええっ!？」

急に言われて困る凜音。

光夜がその腕章を掴み、凜音に差し出す。

が…

「い、いえ！お断りします！私は貴方の弟子ではないので！行きましょう！そろそろ出ないと時間がないわよー！」

きつぱりと断り、そそくさと凜音は寮を出てしまう。

「…やはり避けられているな…」

わかっただがやはりシヨックのようで、肩を落とす王牙。

「まあ仕方ないじゃない。元々プライドの高い娘なのだから、貴方に心を開くのはまだしばらく先よ。」

涅槃が王牙に優しく諭す。

涅槃の眼は光夜達を向いており、凜音の方へと視線を動かす。

「早く行きなさい。」と言っているようだ。

「…よし、じゃあ行つてくるぜ先生。俺達の事、見ててくれ。」

「じゃあな先生。」

「いつてきまーす！」

「い、行つてきます…」

「では、アディオス。」

「バーイー！楽しんでくるぜ！」

それぞれが思い思いの言葉を述べ、寮から去っていく。

あるいは決意に満ちた様子で

あるいは何を考えているのかわからない様子で



あるいは元気よく楽しげで

あるいは不安げな表情で

あるいはその辺りを散歩するかのようで

あるいはテーマパークへと赴くようで

「…いっつておいで。君達の今日が充実する事を、ここより願っているよ。」

## 14話〈乱戦〉

「あいつは昨日の…！しかも白皇家のまで…！」

「周りにいるのつてもしかして…!?」

「ああ、凜音様…そいつらの仲間に…!?」

ざわめきの数々をBGM代わりに、光夜達は道を行く。

注目されるなんてのは気恥ずかしい部分はあれど、かつてより夢見た事。

光夜達は威風堂々と歩みを進める。

「俺達とお仲間だつてよ白皇。良かったな、1人ぼっちじゃないぞ。」

「なつ、わ、私は1人ぼっちなんかじゃありません！元いた寮ではお友達くらいいました！」

「へえ、そのお友達の名前は？」

「へっ？え、ええと…」

光夜が凜音に気軽に話し掛け、反論しつつもなんだかんだで会話に乗る凜音。そしてその会話を楽しそうに聞く超天星。

穏やかな朝の風景だ。

「…にしてもよお、もつと畏怖されたり罵倒の声つてもん覚悟してたが…」  
そう呟く辰覇の耳に入るのは、

「暁君イケメン!」だの「あの2人実は…?」だの

または「坂本辰覇…ウホッ、いい男」とか「きゃー!心ちやーん!」とか、黄色い声に混じって時折背筋が凍るような声まで聞こえてくる。

雷兔に対する黄色い声が聴こえれば、雷兔はそちらに向かって笑顔で手を振って答えキヤーキヤーと喜ばれる様子…

あれ?俺だけなんかおかしくね?

そう思いながらも首を横に降り、気にする事をやめたのであった。

そんな中…

「おい、そこのお前達!!」

突如、大きな声が響く。

が、光夜達超天星は何も気にせず歩き続ける。

(凜音だけは反応したが、気にせず歩く光夜達に驚きつつ、輪の中に戻った)

「いやお前達だよ獅子神 王牙の弟子達い!!なんで無視すんだあ!!」

無視されて怒った相手は、「獅子神 王牙の弟子達」と名指して呼び掛ける。

もちろん名指しされたなら止まらない訳にもいかず、光夜達はその声の主を『睨み付けた』。

「ひっ!？」

「おう、呼んだか三下。俺達をわざわざ呼び止めるとは何の用だよ？」

睨んだだけで怯んだ相手だ。

光夜は敢えて『格下』扱いして声の主に問いかける。

「さ、三下…!?!僕はな！お前達と違つて大会優勝の実績を持っている！ランキングにも乗っているんだぞ！」

「ほう、面白いですね。ならばお名前を聞かせてもらつても？」

綺羅麗がニタリとおぞましい笑顔をしながら、触れ合つてしまいそうな程近くに顔を寄せて問う。

「ぼ、僕は『相浦 真二（あいうら しんじ）』だ！昨日ズタボロにされたデュエリストの中に友人がいた！僕が奴等の敵を討ちに來たのさ！」

綺羅麗の庄にめげずに自分の意見を貫き通す。

それはさぞ素晴らしい事である。

だが…

「は？デュエルに負けた雑魚のために俺達を止めたのか？お前程度が？」

光夜が真二を冷たい目で見下しつつ、吐き捨てる。

「な、なんだとお…!?!」

真二は激昂し、光夜に掴みかかろうとする。

その時。

「邪魔だ！すつこんでろ小僧！」

「ひえっ！」

横から現れた大男に首根っこを捕まれて放り投げられ、真二は盛大に転ぶ。

その大男を、光夜は見覚えがあった。

「ん？昨日白皇と一緒に歩いてた…」

「小波（さざなみ）…」

辰覇とそう変わらないくらいの大柄な男。

凜音に付き従っていた小波と言う名の男。

光夜を、凜音を。敵視するかのような眼だ。

「凜音様。あんまりじゃあないですか。付き従っていた俺達とはろくに会話もしないのに、貴方を侮辱したそいつと仲良しこよしだなんて。」

落胆。その感情が眼から滲み出ているようだ。

「わ、私は別になかよ「いや部外者がなんの用だつて。こいつは俺が正式に勝ち取った

んだからあんたごときには関係ないだろ。」

凜音の言葉に被せるように、凜音の前に光夜が立ち塞がり、小波を『部外者』と呼ぶ。  
「…部外者、か。これでも白皇家の付き人なんだがな。」

「少なくとも、俺にとつては部外者さ。俺と白皇の2人で決めた賭け事であり、付き人風情が口を挟む事ではない。違うか？」

あくまでも、光夜は小波を『部外者』だと吐き捨てる。

沈黙する凜音と小波。

「…なるほど、面白い奴だ。良かろう。凜音様はお前に預けよう。だが、それはそれとして、俺はお前にデュエルを挑みたい。」

「…は？」

険しい表情を和らげたかと思いきや、唐突にデュエルを挑んできた小波。

光夜も訳がわからないといった様子だ。

「ぼ、僕もお前に挑むぞ！お前達獅子神 王牙の弟子共に調子に乗らせてたまるか！」

先ほど盛大に転ばされた真二が光夜を指差してデュエルを挑む。

その心の強さには感服だ。

だが、

「貴方は僕に用があるのでしょう？ならば僕がそのデュエル受けましょう。大将にば

かり美味しい思いはさせませんよお？」

真二の前に現れ、愉快そうに笑うは綺羅麗。

「の、望むところだよ間抜け！僕は名もないお前なんかには負けるもんか！」

膝は震えているがまつすぐ綺羅麗を見つめて戦線布告する真二。

そんな彼を笑う者などいない。

それどころか、周囲の者達に闘志を滾らせた。

「わ、私も貴方達に勝負を挑みます！凜音様を私達の寮に返してください！」

横から現れるは3人組の女生徒。

その真ん中にいる子が勇み、要求する。

「楽しそう！僕がそのデュエル受けるー！いいよね、こうや？」

はいはい！と元氣よく手を上げ、光夜に確認を取るの、心。

「当然だろ。楽しく遊べ。」

「わは♪じゃあよろしく！」

「「「、心ちゃん：／／／／」」」

屈託のない笑顔を受け、キュンとときめく3人娘達。

更に…

「おうおう！どうせなら俺も相手してくれよ！あんたらの実力この目で確かめさせて

欲しいもんだ！」

ヤンキー風な長身の男がメンチを効かせつつ挑みかかる。

「…まったく、朝っぱらから騒がしい事になったなあ…おめえは俺が受け持つてやるよ。」

受け持つは、辰覇。

男の前に立ち、見下ろす。

その目は油断も嘲笑も無く、ただ見下ろすだけだ。

「おうあんたか！俺は須藤 権蔵（すどう ごんぞう）！夜露死苦う！！」  
辰覇に怯む事などまるでなく、下から睨む。

闘志はギンギンだ。

「おお〜！面白そうじゃん！なら俺ともやろうぜ！」

野次馬をかき分けて現れたのは、なんと水面。

腕をひつ捕まれて、後ろに花道もいる。

「おつ、みなもっちゃん！じゃあ俺とやろうぜ！」

水面と相對するは雷兎。

お互いに楽しそうにしている。

「…ふん、僕はやらない。お前達弟子となんて…」



水面とは対象的につまらなそうな花道。

すると…

「なんだよ花道。負けるのが怖いのかー?」

挑発とも取れる水面の言葉。

花道には効いたらしい。

「…良いだろう、やってやろうじゃないか。影善っていったよな。君は僕とやろうじゃないか。」

「えっ、や、やるんですか…? 困る…」

花道に挑戦を挑まれ、挙動不審になる影善。

だが…

「…まあ、皆やると言っているし、やらない訳にもいかない…か…はい、よろしく願います。」

やると決めたすぐ、まっすぐに花道を見つめ、真剣な表情でデュエルを受ける影善。その場にいる超天星の全員が、対戦をする事が決まった。

「白皇は俺達のデュエル見てな。せっかくだから自己紹介してやるよ。」

光夜は側でオロオロしている凜音に声をかける。

知って欲しいのだ。『自分達を』。

「…なら、午後の実戦授業を使ってやるとしよう。許可は俺が取っておこう。お前達獅子神 王牙の弟子達のデュエル、楽しみにしている連中は多い。」

取り仕切るのは、小波。

これで準備は整った。

「いいぜ。俺達は逃げない。あんたらが俺達の障害として立ちはだかるのなら、全て風呂払うだけだ。」

先ほどと変わることなく、吐き捨てる光夜。

だが、言葉はそれで終わらない。

「よく聞けお前達。俺達『獅子神 王牙の弟子』はこの紋章の元、お前達の挑戦をことごとく受けよう。」

そして覚えておけ。俺達はやがて獅子神 王牙を越える若き星々。名を『超天星』。いつまでも『弟子達』だなんて下らない呼び方はやめてもらおうか。」

光夜は左腕に付けた紋章を周囲に見せつけ、ここに宣言する。

「今日のデュエル。楽しみにしてるぜ。」

光夜が今この場において、初めて笑ってみせた。

## 15話 戸惑い、覚悟

「…それにしても、あんたと同じクラスとはねえ…ほんと因果なものだ。」  
あれから少しして、それぞれが教室に入る。

光夜と凜音、そして辰覇はまさかの同じクラスで、1—A組。

心は1—Bで、雷兎は1—D。影善が1—E。綺羅麗は1—F。

全6クラス、1クラスに40人の計240人。

学力面等の入学難易度に比べたら多い人数と言えるだろうか。

その中でも光夜と凜音が同じクラスとは、なんとも数奇な運命か。

「う、うるさいわね…昨日の時点でわかっていた事じゃない…それとどうして私に話し掛けるのかしら…」

わざわざ自分の隣の席に座って話し掛けてくる光夜を鬱陶しく、それでも強く返せない凜音。

ちなみに、教室は大学のように教壇をとり囲う階段状になっており、一つの長テーブルにつき3席。

凜音は中央列のど真ん中にあるテーブルの、更に真ん中に座っており、光夜はそのす

ぐ左にて凜音に話しかけている。

当然目につく2人。他の生徒からは注目を浴びまくっている。

「これでも仲良くしようと思ってるんだぜ俺は？少しくらい会話に乗ってくれよ。」  
そう言われても…と困る凜音。

2人きりで会話をするなんて、昨日の今日で出来る程光夜への好感度は高くない。

「そうだけ白皇。同じ寮生のよしみだ。仲良くいこう。」

「わわ、坂本君!？」

光夜からすこーし距離を取っていた凜音の横から辰覇が現れてドカツと席に座る。

その凶体のデカさに驚いて光夜側へとズレる凜音。

「おいおい、そんな慌てて逃げるこたあないだろ。」

「に、逃げた訳じゃなくて！あまり男性と近くで接した事なんてないから…その…」

「お、おう…なんか悪かった…」

急によそよそしくなる凜音に、辰覇も戸惑う。

「もしかして俺に気があるのか？」

と一瞬思うが、よくよく考えたら貴族の令嬢が男2人に逃げ場を無くされているのだ。  
だ。

借りてきた猫のように大人しくもなろう。

「よし、話は終わったか？なら少し早いが挨拶から授業入るぞー。」

凜音達の会話が途切れたすぐ、教壇から声が聞こえ、皆そちらに注目する。

そこには黒い肌にドレッドヘアの男性の姿。

「…ん？あの人見覚えあるな…」

「見覚えあるつちゆうかよ…」

「見覚えくらいあるに決まってるじゃない。だって、《プロデュエリストのギーガー・テイケッド》ですもの。」

そう、そこに立っているのは、元プロデュエリスト。

プロから引退し、講師をしている。

大物の登場に、生徒達は興奮を隠せない。

「いらねいだろうが一応自己紹介だ。ギーガー・テイケッド。元プロデュエリスト。今はこの学校で英語教師だ。元プロって事で君らが俺の事が必要とする事もあるだろう。それと、この学校の授業において昨日説明されてるだろうがおさらいだ。

この学校では、授業45分、休憩15分。

二時間同じ学科を続けて行う。

校舎が広い故の移動等の負担軽減が主とされている。

また、午後の二時間は全てデュエルに関する授業となる。

本来ならば今日はフェイズごとの流れのおさらい等になるはずだったが…

そこのお前達。獅子神 王牙の弟子達がデュエルを挑まれている事、それによるデュエルフィールド複数の使用が許可されたため、午後はそのデュエルの観戦に変更された。今さら知ってるであろう事をダラダラと解説するよりもその方が身に付くだらう。」

昨日に説明されていた事の復習。

そして午後の内容の開示。

「文句、質問が無ければ授業に移るとしよう。」

ギーガーが話を切り、授業の準備へと移る。

教科書を持ち歩く必要はなく、USBメモリーを机に然るべき場所に差し込む。

するとモニター、キーボードが机に浮かび上がる。

直接触れる必要も持ち歩く必要もなく、宿題もデータ送信しておけば済んでしまうため、この学園では当たり前前のシステムとして活用されている。

く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く

「…ふう…」

一時間目の準備が滞りなく終わり、トイレにいる凜音。鏡の前でため息をつく。

「あ、あの！凜音様！」

「ひゃっ！」

ふと後ろから凜音を呼ぶ声。

緊張しているのかやや大きな声を出され、凜音はビクツ！と身体を震わせる。

「あ、ご、ごめんなさい！私驚かせるつもりは…！」

「え、ええ、いいのよ。私もぼーっとしてしまって…何か用かしら。音乃木 之音（おとのぎ ののん）さん。」

そこにいたのは、今日の午後に心とデュエルする事が決まった少女、音乃木 之音。

朝は3人組だったが、今は1人だけのようだ。

「い、いえ…あの…いきなり寮を去ってしまったので…せつかく、仲良くなれるかなと思っていたので…」

不安げな表情。

声も弱々しく、次第に消えていきそうだ。

「べ、別に寮が変わったからといって、こうして話す事は出来るじゃない？気にしすぎ

よ？」

当たり前障りのない言葉。

凜音からはそれくらいしか言えない。

だが、之音にはそれでは駄目なようで…

「凜音様…私、今日心ちゃんを倒して、貴女に戻ってきてもらいたい…私、負けませんから…！」

「之音さん…」

身体を震わせ、涙を浮かべながらも、之音は力強い、決意の眼差しを凜音にぶつける。凜音が何かを言うよりも早く、之音は出ていく。

「…私は…」

戻りたいのは事実。

だが、いまいち決意の固まらない凜音はうつむき、その場から動けなかったのだった。



## 16話 夢宴、祭囃子

午後になり、多くの生徒達はデュエル会場に集まっていた。

獅子神 王牙の弟子達、『超天星』達のデュエルとあつては黙っていられない。

今朝決められた事にも関わらず超天星達の顔写真が販売されたり、誰が勝つのかという賭けが盛んに行われていたり、飲み物や軽食の売店がいくつも開かれたりとお祭り騒ぎであつた。

「す、凄い事になつてるわね…」

キヨロキヨロ見渡しながら、会場を一人うろつく。

昼食は取つたばかりで軽食はいらないが、飲み物くらいはと思つて歩いている。  
のだが…

「白皇さん！俺とデュエルしませんか！」

「いやいや白皇さん！俺と一緒に観戦しましょう！」

「凜音様！そんな男達なんかとしないで私達と！」

「凜音様！」「白皇！」「凜音たんはあはあ」

自分がアイドルかのような扱いを受けている。

煩わしいのはあまり好きではなく、かといって強すぎる言葉を使うのも躊躇われる。どうしようか困っていると…

「よう白皇女史。待たせたな。」

「あつ、聖生徒会長。」

まさに救世主。

人ごみを威光だけで振り払い、凜音との間に何一つ隔てがない。

「何か買いたいのか？ならば行こう。売店は全て把握している。」

「えつ、あつ、はい！そ、それじゃあ皆さん、ごきげんよう。」

一言だけ周りに告げると、さっさと聖についていってしまう凜音。

素っ気ない態度だが、それはむしろ周囲から羨望の声を生むのである。

「可憐だ…」「あの2人お似合いね…」「暁君が本命じゃなかったのかしら…」「いや、あ

の2人は貴族同士での付き合いがあるってだけだろ？」「凜音さんはあはあ」

暫しざわめきが広がるものの、ここにいる本来の目的を思いだし、みんな一斉に動き

出したのであつた。

「まったく、人気者は大変だな白皇女史。」

「あの、助かりました…小波とかがいないものだからみんな群がってきてしまつて…」

「うむ、奴等がいけない時の事を考えていなかった我々の落ち度だ。次からは気を付け

るとしよう。」

そう、凜音はそこら辺の一般女子生徒とは違う。

正真正銘貴族令嬢。しかもとびきりの美少女。

男女問わずに人が集まるのは明白。

初日は小波等周囲に付き人がいたために近寄る者は少なかったが、光夜に負けた事、そして付き人から引き離された事。それは大きな動きを作るきっかけになっている。

「いえ……ただ、そうしていただけると助かります……」

「うむ。任せておけ。」

それから2人は売店を2、3巡り、空いている観戦席を探す。

と……

「おつ、あそこにいるのは……」

「あら、聖ちゃんに凜音ちゃんじゃない。ちようど良かったわ。席取つてあるからいらつしやいな。」

中央モニターのよく見える席に、涅槃が座つていた。

一際目立つ風貌のせいかな、周りは人が少ない。

聖達に気づいた涅槃は、2人を手招きして相席を求む。

断る理由も無ければ最高の観戦席。2人は迷う事なく涅槃の横へと座る。

「涅槃さんお一人ですか？」

「そうなのよ。王牙さんったら私との観戦よりも大事な事があるってふらつとどこかへ行っちゃったのよね。ほんとと自由気ままな人。」

困ったような口調と、どこか嬉しそうな表情。

不思議な人だ。と凜音は思う。

~~~~~

所変わって王牙は、とある一室にてやや緊張した面持ちで座っていた。

「おうおう、《百獣の王牙》ともあろう奴が随分緊張しちまつて。まるで借りてきた猫じゃあないか。」

王牙の前にいる男は辰覇よりも背丈、がたいが大きく、手には酒瓶。

その体格からすると瓶コーラでも持っているかのようなだ。

壮年らしく、白髪で長い髭を生やしているが、その眼は鋭く、気楽そうにしているにも関わらず、気迫は王牙すら緊張しているのが表に出る程。

「…それはそうでしょう。貴方と2人きりなんてリラックス出来るものではないですよ。《神前寺（しんぜんじ）理事長》。」

そう、ここにいる壮年の男こそ、この学園の長。

神前寺 繁之助（しんぜんじ しげのすけ）

かつて遠い昔、初代デュエル王と戦った事があると言われている、年齢不詳の生きた伝説である。

「カカカ、まったくビビりなガキだなあ。

太鼓判押してプロとして送り出してやったのにいきなり姿消して、かと思いきや寮長にさせるだの無茶苦茶ばかり言いやがって。お前じゃなかったら聞いてやらなかったっての。」

愉快そうに笑いながら、瓶を勢いよく傾ける。

度数がかなり高そうで、王牙は顔をしかめる。

が、当然この男が王牙の忠告など聞くわけはない事をしてしているため、王牙はため息。

「…で、お前の育てた弟子達はどうなんだ。強いのか？昨日の生意気そうな小僧は無茶やつて白皇の小娘潰したが、あれを實力そのものとはいえねえからな。」

酒瓶を口から離すと、繁之助は真剣な表情で問う。

我が儘を聞いてやった意味はあるのか、と言っているのだ。

「…ええ、強いですよ。順調に成長したなら、皆プロにまで到達出来る。それだけの原石達です。」

迷いの一切ない、力強き発言。そして繁之助と真つ直ぐ眼を合わせる王牙。
そして…

「…カカカ、それは何よりだ。この後のデュエル、楽しみだぜ。」

2人は言葉をそれきりにして、モニターを眺める事にした。

デュエル開始まで、もう間もなく…

17話〈先攻展開〉

『レディース！& a m p；ジエントルメエーン!! さあ待たせたな諸君!! これより獅子神王牙の弟子達、『超天星』6人対挑戦者達の連続デュエルを行う!!』

時間になって現れたのは、英語教師のギーガー。

元プロの登場に沸き立ち始める会場。

授業中とはまるで違うテンションのギーガーの司会に、大半は二重で驚くだろう。

『司会はこの俺、ギーガー・ティケッド! 熱く盛り上げていくからよろしく!!』

掛け声と共に右腕を高く上げ、挨拶を決めるギーガー。

観客の心を掴むのが手慣れている。

『では今回のデュエル形式についてだ!』

ライフは8000の一本勝負! 一度に二組ずつデュエルを進める! 今回はソリッドビジョンによる衝撃は抑えてあるため、気兼ねなく観戦出来るようにしてある! さあ、それじゃあ対戦者の入場だ!』

誰が最初なのだろう、わくわくの止まらぬ観客達。

そして…

『まずはAゾーン!!』

昨日入学するなり生徒を100人切りして話題の男!

《超天星 繰崎 綺羅麗》!!そして相対するのは、友の敵討ちに燃える《相浦 真二》!!』

沸き上がる歓声と共に、両者はデュエルフィールドに現れる。

どこか飄々と、楽しそうな表情の綺羅麗。

それに対し、敵意を剥き出しにし、今にも噛みつかんばかりだ。

「ふふふ、楽しいデュエルにしましょう」

「ああ、楽しみだよ。とてつもなくな!」

『続いてBゾーン!』

輝く笑顔の快男児! 《超天星 天童 雷兔》!!

対するは二年生! 同じく快男児として名高い爽やかデュエリスト! 《海原 水面》!!』

観客に手を振り笑顔を振り撒きながら、両者は現れる。

エンターテイメントと言うものがわかってる。

というより目立ちたがりなのだろうか。

「よっしゃみなもっちゃん! 盛り上げていこうぜ!!」

「おうとも雷兔っち! 全力尽くして楽しむぞ!」

お互いに楽しんでデュエルをしよう。

その意識は共通らしく、とても楽しげだ。

『よし！各自自分のデッキを用意、ソリッドビジョンを起動だ！』

ギーガーに促されるままに、デュエルディスクにデッキをセットし、ソリッドビジョン機能を始動させる。

『各自先攻後攻を決めな！』

「先攻は僕が貰うぞ！」

「ふふふ、ええどうぞ。元より後攻のつもりです。」

綺麗麗VS真二は、真二の先攻。

「最初はグー！じゃーんけん…ポンツ!!」

雷兎と水面は近寄って大声を出してじゃんけんをする。

勝ったのは…

「つしゃあ！俺が先攻な雷兎っち！」

「うおお!!どうして俺はチョコキを出しちまったんだあ——!!!」

勝ったのは、水面。

じゃんけんに負けた雷兔は項垂れて己の負けを嘆いた。

とにかく、全ての準備は整った。

『さあ、これで全ての準備は整った！全員カードを5枚引け！始まるぞ、大連続デュエル！デュエラー……』

スタートオオオオオオ！！！！』

ギーガーの掛け声により、ついに超天星達のデュエルが幕を開けた。

「僕のターン！手札から《捕食植物オプリス・スコープオ》を召喚する！こいつは召喚成功時に手札のモンスターをコストに、デッキから捕食植物モンスターを特殊召喚する！僕は手札から《捕食植物セラセニアント》をコストにする。来い、《捕食植物ダーリング・コブラ》！！」

「ほう、捕食植物……良いテーマです。」

最初に動いたのは真二。

閻属性・植物族で構成された捕食植物。

早くも2体のモンスターを展開していく。

「ダーリング・コブラは捕食植物モンスターによって特殊召喚した場合、デュエル中」

度だけ融合、フュージョン魔法カードを手札に加える事ができる！僕はデッキから《超融合》を手札に加える！」

「ふむ、超融合ですか…それは厄介ですね…」
超融合。

手札1枚のコストと引き換えに、フィールドのモンスターを用いて融合召喚を行うカード。

本来融合召喚は手札、フィールドを用いるが、この超融合はフィールドのみ。

しかし、相手ターンにも使える速攻魔法かつ、発動時にチェーンする事は出来ない。そして最大の強みは、『相手のモンスターをも融合素材に出来る事』だ。

「教えてやるよ繰崎い！僕は昨日お前が倒した連中とは違うって事をさあ！」
「…これはなかなか楽しめそうですね。」

高らかに吠える真二。
それでも、綺羅麗の笑みは揺るがない。

「さあデュエル開始だ！俺のターン！」

真二がターンを始めてすぐ、それに追い付くかのように水面がデュエルを開始。

「…よし、俺は手札から《白鱒（ホワイト・モーレイ）》をコストに、《白棘》（ホワイト・ステイングレイ）》を特殊召喚！更に魔法カード《白の水鏡（ホワイト・ミラー）》をデツキから手札に加える！そして、墓地から特殊召喚された白鱒は自身の効果によってチューナーになる！」

「チューナー！つまり…」

「おうとも！俺のこのデツキはシンクロ召喚ベース！俺の展開力について来れるか雷兔っち！」

無駄の無い鮮やかな動き。

水面ファンだけでなく、観客達から歓声が響く。

「いくぞ繰崎い！僕は手札から永續魔法《ブレデター・プランター》を発動！1ターンに1度、墓地の捕食植物の効果を無効にして特殊召喚する！効果発動！来いよ、捕食植物セラセニアント！」

こちらも無駄の無い動き。

しかし、お互い動くのはこれからだ。

「僕は手札から《融合》を発動！素材とするのは、フィールドのダークリング・コブラと

セラセニアント！」

「俺はフィールドの白棘☒と白鱒でチューニング！シンクロ召喚！」

2人は、それぞれ得意な召喚方法を使用する。

「喰らえ奴を！僕の邪魔者は根こそぎ取り払え！」

融合召喚！《捕食植物キメラフレシア》！

2体のモンスターが混ざり合い、おどろおどろしい植物の化物が姿を現す。

攻撃力、2500。

「さあ開幕だ！美しき姿を皆に見せてやろうぜ！シンクロ召喚！レベル6、《白闘気海豚（ホワイト・オーラ・ドルフィン）》！」

2体の魚が床の中へと潜って姿を消し、代わりに白いイルカが飛び出してきた。

攻撃力、2400。

「これで終わりじゃないぞ！セラセニアントはフィールドにいる時に効果、戦闘で墓地にいくと「プレデター」カードをデッキから手札に加える！加えるのは《捕食植物コーデイセツプス》！更にカードを1枚セット！」

「俺は手札の白鱒と《サイレント・アングラー》をデッキに戻して《強欲なウツボ》を発動。デッキから3枚ドロ……よっし！カード2枚セットだ！」

2人とも、自分なりの盤面を作り上げる事に成功したらしく、満足気である。

「さあ！ターンエンドだ!!」

2人のターンが終わり、次は綺羅麗、雷兔のターンが来る…

18話く振り子揺れし時、悪魔は笑うく

『さあ、無駄のない良い展開をして見せた挑戦者達！

対する超天星達はいったいどんなデッキを使うのか！』

真二、水面がターン終了を宣言してから、ようやくギーガーが実況。

空気を読んで騒がないようにしていたのだろうか。

「素晴らしい……ええ、なんて素晴らしい動きなのでしょう！ならば僕も答えなくてはなりませんね！僕のターン、ドロー！」

真二の事を盛大に褒め称え、自分のターンへと移行する綺羅麗。

さて、確実に強力な伏せがあるのがわかってる綺羅麗はどう動くのか……

「僕も張り切っていくとしましょう……まずは魔法カード、《強欲で金満な壺》を発動！コストにEXデッキを6枚裏側で取り除きます！」

「……強金だとおっ！」

綺羅麗が手始めにやったのは、多大なデメリットを持つドローカード。

強力なカードの多いEXデッキを6枚と約三分の一失い、このターン他にドローが行えなくなる。

が、手札の枚数が1枚増やせる。

それによって、手札枚数は7枚からのスタートだ。

「ふむ、悪くない。僕は手札から《魔界劇団―メロー・マドンナ》をペンデュラムゾーンに設置します。」

「ま、魔界、劇団…ペンデュラムモンスター…！」

ペンデュラムモンスター。

モンスターと魔法、2つの特性を持つ特殊なカード。

ペンデュラムゾーンに設置した場合のみ魔法カードとして扱い、モンスターの時とは異なる能力を発揮する。

『おおっと！超天星、繰崎 綺羅麗の使うデッキは魔界劇団！ペンデュラムによる大量展開来るか!?!』

ペンデュラム使いはやや珍しく、ギーガーは熱く叫ぶ。

「このメロー・マドンナ。ライフを1000払うとデッキから魔界劇団モンスターを1枚手札に加えてくれます。」

僕は《魔界劇団―エキストラ》を手札に。そして今加えたエキストラをもう片方のペ

ンデュラムゾーンにセッティング！」

両側にペンデュラムカードが設置される。

これにより、それぞれのペンデュラムカードに記載されている『スケール』の数値以内のモンスターを手札、表側EXから特殊召喚が出来る『ペンデュラム召喚』が可能となる。

が、もちろん綺羅麗はまだ動いていく。

「ペンデュラムゾーンに存在するエキストラの効果！相手にモンスターが存在するならば、ペンデュラムゾーンから特殊召喚出来ます！エキストラを守備表示で特殊召喚！」

にゆるつ、とフィールドに現れたエキストラ。

レベル1、攻守100と弱小モンスターである。

ただし、もちろん効果は優秀である。

「…いや、こいつに使っても仕方ない。通す。」

真二は一瞬考えはしたが、あえてスルー。

その先を見ているのか。

「ほう、それはありがたい。」

ではエキストラ自身をリリースしモンスター効果を発動。デッキから魔界劇団モン

スターをペンデュラムゾーンに設置します。設置するのは《魔界劇団―ワイルド・ホープ》！」

ガンマンの姿をしたモンスターを、ペンデュラムゾーンに設置。

それぞれスケールは0と2。

だが…

「ペンデュラムゾーンにあるワイルド・ホープの効果。もう片方にある魔界劇団ペンデュラムカードのスケールを9にします。」

『繰崎ついに両側にスケールを用意した！これは大型モンスターの大量展開か!? かし対する相浦のセットも気になる！さあ、繰崎どう来る!?!』

(そうさ、魔界劇団は全て閻属性…2、3体くらいならこのセットした超融合で…)

そう、真二は見せつけるかのようにサーチした超融合をセットしている。

多少脅威を感じたら、すぐに超融合の素材にしてしまえばいいのだ。

しかし、それでも綺羅麗は余裕のある表情、というよりもこのデュエルを楽しんでい
るようだ。

「…ではいきましよう！僕は、ペンデュラム召喚を宣言！」

(来るか…!)

ついでに行うペンデュラム召喚。

真二は身構えた。

そして、綺羅麗は召喚口上を述べ始める：

「振り子の先は摩訶不思議！素敵な劇団ご開演！ペンデュラム召喚！おいでませ！客を出迎えるは彼等なり！

《魔界劇団―プリティ・ヒロイン》《魔界劇団―ビッグ・スター》!!」

バーン!!

と大量のパーティクラッカーや紙吹雪の中から現れた2体の魔界劇団モンスター。地に降り立つなり、綺羅麗とともに右手を降り下げつつお辞儀をした。

『さあ現れた！派手な演出と共にペンデュラム召喚によって登場したのは2体！特にビッグスターは魔界劇団のエースモンスター！これが皦崎 綺羅麗の切り札か!?!』

綺羅麗の華麗なる召喚口上と、ペンデュラム召喚による展開。

会場も盛大に沸き上がる。

真二の手札、残り1枚。

綺羅麗の手札、現在残り4枚。

真二の盤面

モンスターが捕食植物オオリス・スコーピオと捕食植物キメラフレッシュア

魔法・罨ゾーンにプレデター・プランターとセットカード1枚

綺羅麗の盤面

ペンデュラムゾーンに魔界劇団―ワイルド・ホープと魔界劇団―メロー・マドンナ。

フィールドに魔界劇団―プリティ・ヒロインと魔界劇団―ビッグ・スター。

お互いのライフ

真二が8000。

綺羅麗が7000。

会場が綺羅麗に意識を向けている中で、雷兔も自分のターンに入っていた。

「俺のターン、ドロ―！」

俺は手札から魔法カード《電脳堺都―九龍（でんのうかいと―クウロン）》を発動！」

「…電脳…堺…？」

水面は聞いた事がないカードに困惑の色が隠せない。

いや、見ている他の観客達もだろう。

そして、そんな事気にせず雷兔はその魔法カードを皮切りに動き出す。

「へっへっへ…この九龍はデツキから電脳堺門魔法・罨カードをフィールドに表側で置く能力を持つ！俺が置くのは、永統罨《電脳堺門―朱雀（チュチュエ）》！」

「トランプカードを表側で!？」

何をしてくるのかまるでわからない。

水面はせっかく2枚もセットしていたって、これでは下手に動く事が出来ない。

「続けるぜー!俺は手札から《—電腦堺媛—瑞々（でんのうかいえん—ルウルウ）》の効果を、電腦堺門—朱雀を対象に取って発動!」

「いったいなにをするんだ…?」

「デッキから、対象に取ったカードとは別のカードの種類、つまり今は魔法かモンスター—の電腦堺カードを墓地に送りつつこのカードを特殊召喚!更に選択しなかった種類の電腦カードを1枚手札に加える事が可能さ!」

「て、手札からの効果で全て解決しちまうのか…くっ…」

水面の伏せの1枚は《ブレイクスルースキル》。

フィールドのモンスター—全体を対象に、そのターン中効果を無効に出来る。

しかし、手札で発動するモンスターには無力。

悔しくも、通すしかない。

「ルウルウの効果で、デッキから魔法カード《電腦堺門—青龍（チンロン）》を墓地に送り特殊召喚!更にデッキからまだ選んでいないカードの種類、つまりは電腦堺モンスターを手札に加える!これによって、デッキから《電腦堺彘—彘々（でんのうかいち

「ヂイヂイ」を手札に加えるぜ！」

雷兎の前に登場した機械少女。

瑞々は更に能力を発揮。

手札の枚数が減らないままに、更に展開をしていく。

「手札に持つてきたヂイヂイ効果！対象はチュチュエ。デッキから《電脳堺姫―娘々》（でんのうかいきにゃんにゃん）を墓地に送り、自身を特殊召喚する！そしてこのヂイヂイ、自身の効果で特殊召喚した場合、エンドフェイズに墓地にある電脳堺モンスター一体を手札に加える事が出来る！」

「なんて回転力……」

ただでさえ見たことのないテーマ。

しかも、かなり独特な動き方。

今の所、止める場所がわからない。

そして瑞々の横に現れた四つ足の獣。

これで、レベル3のモンスターが2体。

「そしてルウルウはチューナー。わかるかい？」

「っ！まさか！」

「そうさ、俺のこのデッキも、シンクロをするのさ！ルウルウ、ヂイヂイでチューニン

グ!!

来たれ電腦世界の神獣よ! 秘蔵されし神秘の力を見せてやれ! シンクロ召喚! レベル6、《電脳堺獣―驚々(でんのうかいじゅう―ジュジュ)》!」

異次元から飛び出てきた、四肢を持つ驚。

攻撃力、2400。

白鬮気海豚と並ぶ攻撃力。

その眼光が見据えるのは、海豚か水面か。

「ジュジュは1ターンに1度、墓地の種族・属性の同じモンスターを2枚除外することで、相手のカード1枚を対象に『墓地に送る』。俺はジュジュの効果でルウルウ、にやんにやんを除外。白鬮気海豚を墓地送りだ!」

「破壊じゃねえのかよ! くそつ、リバースカード! 《ブレイクスルー・スキル》! これでジュジュの効果が無効にさせてもらおう!」

水面のセットカードによって、ジュジュはデメリットだけ行い、効果が無効に。墓地にはチイチイしかモンスターがない…

「やべ、いろいろミスっちゃった…!」

もつとうまくやれたろ俺…!」

プレイングミスを行ってしまったのか、雷兎には焦りの表情が見える。

「さあ、どうするよ雷兔っち!!」

焦る雷兔を見て、プレッシャーをかける水面。

雷兔の手札、残り4枚。

水面の手札、残り1枚。

雷兔の盤面

モンスターが電脳堺獣―鷺々

魔法・罨が電脳堺門―朱雀

水面の盤面

モンスターが白鬨気海豚

魔法・罨がセットカード1枚。

お互いのライフ、8000。

19話 数多の壁を乗り越え、彼らは笑う

視点は綺羅麗の方へ戻り、綺羅麗がペンデュラム召喚をした直後から始まる。

「ふふふ、さぞ聡明なる貴方には必要ないと思いますが、念のため説明しておきましょうか……この魔界劇団ビッグ・スターは登場に成功時、相手は魔法・罫を発動出来ません。つまり、貴方が先程持ってきた超融合も、登場時には発動不可能！悔しいでしょうねえ！」

ビッグ・スターの効果によって安全に着地させる事に成功し、綺羅麗は真二を煽る。それはもちろん効果覷面。真二の顔は怒りからかヒクついている。

「うるせえ！だがお前が行動を取った時には発動出来るようになる！大した違いは無いだろうが！」

そう、それはその通りなのだ。

綺羅麗が何かしら動きを見せれば、真二は即超融合が使える。

事態は未だピンチだろう。

だが、綺羅麗はそれさえ、愉快そうに笑うだけである。

「ええ、それはそうです。なので、僕は手札からこのカードを発動しましょう。魔法カード《魔界台本―魔王の降臨》！」

「!!そ、そのカードは!」

綺麗麗が見せたカードに、真二は狼狽える。

なぜならそのカードは…

「そう!この魔王の降臨!レベル7以上の魔界劇団がいる時、発動時に相手はチェンが出来なくなるのです!」

立て続けに超融合を対策した動き。

まさか手札に持っているなんて思わなかった真二の精神には大ダメージだ。

「この魔王の降臨は自分の魔界劇団モンスターの種類だけ、表側のカードを対象に取り、破壊します。そちらのキメラフレシア、プレデター・プランターを破壊するつもりでしょう。」

「くそつ、なんて事しやがる…!」

何も出来ぬまま、真二は大事なカードを破壊されていく。

プレデター・プランターを破壊されてしまったのは、この後の立て直しにも響いてくるだろう。

「ふふふ、キツイでしょう?」

更にビッグ・スターの効果を発動するとしましょうか。ビッグ・スターは、1ターンに一度魔界台本カードをセット出来ます！僕がセットするのは2枚目の魔王の降臨！」

「まただど!?!」

場に残るオフリス・スコープイオまで潰しにかかる。

真二は精神を揺さぶられる。

そして…

「なら僕はここでセットカードを発動する！手札の捕食植物コーデイ・セツプスをコストに《超融合》を発動!!僕のオフリス・スコープイオと、お前のモンスター2体、閻魔性3体で融合する！」

真二の発動した超融合により、敵味方問わず3体のモンスターが織り交ぜられていく。

そして…

「喰せ！お前ならば全てを喰らう事が出来るだろう！」

融合召喚！《捕食植物トリフィオヴェルトウム》

3体の閻魔性モンスターを元に生まれ落ちたのは、竜の姿をした化物。

攻撃力3000。

攻撃力の基準だけで見るなら、このカードが恐らくは真二の切り札。

「あはははは……こいつは攻撃力3000！しかもお前の特殊召喚を無効にする効果を持つている！お前のペンデュラム召喚はもう！怖くなんか無いんだよ！どうだ！悔しいだろお！」

対策を取った行動も、結局は無意味。

こうなつては真二の方が有利。

誰もが、そう思う。

綺羅麗を除いては。

綺羅麗はまだ、笑ったままだ。

真二の盤面

モンスター 捕食植物トリファイオバルトウムのみ

魔法・罫 無し

手札 1枚

綺羅麗の盤面

モンスター 無し

魔法・罫 魔界台本―魔王の降臨(セット)

ペンデュラムゾーン 魔界劇団―ワイルド・ホープ 魔界劇団―メロー・マドンナ

手札 4枚

そして、雷兎と水面に視点は移る。

除去効果を持つシンクロモンスター電脳堺獣―鷲々（でんのうかいじゅう―ジユジユ）の効果を無効にされ、そのコストに墓地のモンスターまで削ってしまった雷兎。水面に煽られ、焦りの表情を浮かべている。

「おつ、いいところかな？絶好の席座ってるじゃんか。」

中央モニターを観ていた凜音、涅槃、聖のすぐ近くから声がして、3人が振り替える
と、そこには光夜と辰覇の姿。

「あ、暁君!? 貴方なんでここに!」

「俺達最後になったし、腹減ったって辰覇が言うからさ。まあどうせならこつちで観戦しようと思って。」

涅槃さんに席聞いてたから見つけるのは楽だったよ。」

凜音達のすぐ後ろの席に座る2人。

辰覇はお盆に売店から購入したであろう食べ物をすぐに食べ始める。

「昼飯はどうした辰覇。食べなかつたのか?」

「いや、食ったよ。デュエルするんだし。パワー入れと思うてな。」

「パワー…?」

「こいつの特殊体質だから気にしなくていいぞ白皇。」

ほんとにご飯食べたの?と凜音が疑問に思うくらいの辰覇の食べっぷり。

光夜は呆れながら答えてくれる。

「ふふふ、それにしても、雷兎ちゃんピンチみたいね。どう思う?」

「というか、あの電脳堺つてカード達…私も知らないのだけど…どうということなの?」

涅槃、凜音が光夜に問い掛ける。

凜音ですら知らないテーマはそうそう無い。

「…電脳堺は、今試作段階の新テーマだ。そのテスターとして雷兎が選ばれて、あいつが世界でおそらく初めての所有者だ。」

「ええっ!?!」

新テーマが出てくるのはまあわかる。

が、そのテスターにただの高校生、しかも王牙の弟子とはいえ無名人だ。

驚くのは当然。

「まあその辺りは俺も詳しいわけじゃないからあとは雷兎に聞いてくれ。で、涅槃さんの問いについては…わからない。」

「えっ……？」

光夜がわからないと言うとは思わなかった。

凜音は呆ける。

「実をいうとさ、俺もあんまりやりあえて無かったんだ。受験勉強の真っ只中で雷兎が電脳堺受け取って、俺達が知ったのは受験に合格してからだから。」

「そ、それなら天童君は元はなんのデツキを使っていたの……？」

「……それはいつか、な。」

凜音からの問いを、光夜は含むを持たせながらうやむやにする。

それ以上は話すつもりが無いのがわかり、凜音はモニターに顔を向ける。

そして、雷兎がちょうど次の動きへと入ろうとしている所だった。

「……俺は、墓地にある《電脳堺門―青龍（チンロン）》をゲームから除外し、その効果を発動。デツキから電脳堺モニターを手札に加え、その後手札を一枚、墓地に送る。デツキから加えるのは、《電脳堺麟（でんのうかいりん）―麟々（リイリイ）》。そして手札からは《電脳堺門（でんのうかいもん）―朱雀（チュチュエ）》を墓地に送る。」

「墓地で使える効果があるのか……すげえな……」

手札枚数は変わらずとも、動きやすくはなった。

雷兎は動きを続ける。

「今加えたリイリイの効果！対象はチュチュエー！デツキから《電腦堺姫（でんのうかいき）》—娘々（にやんにやん）》を墓地に送り特殊召喚！更に！デツキからまだ選んでいない種類、つまり魔法カードを墓地に！《電腦堺門—青龍》を再び墓地に送る！」
麒麟の姿をしたレベル6のモンスター。

デツキの回転力を上げ、その存在は新たな召喚への架け橋を作る。

「フィールドにいるジュジュ、リイリイは共にレベル6。これで準備は出来た！」

「レベル6が2体……！」

『来るぞお前ら!!!』

『『エクシーズ召喚!!』』

同じレベルのモンスターを複数使用して行うエクシーズ召喚。

それが今、ジュジュさえも素材にして行われる。

「舞えよ電子の不死鳥！ジュジュをも越えるその力、ここに示せ！エクシーズ召喚！

《電腦堺凰（でんのうかいおう）》—凰々（ファンファン）》！」

2体のモンスターが光の粒子となって分解。

流れ星のように光を放つ光球が地面を回り、門を作る。

「ピーーーー!!という甲高い鳴き声と共にその門から飛び出したのは、不死鳥。

門を作っていた2つの光球はその不死鳥の周りを漂い、エクシーズ召喚が成功した事を告げる。

『ついにお出まし！エクシーズ召喚！これが天童 雷鬼の切り札か!?』

水面を見下ろす赤き鳳凰。

観客はその圧倒的な姿に、心奪われる。

「このファンファンはエクシーズ素材を2つ取り除く必要はあるが、強力な効果を持つ。いくぞ、ファンファンの効果発動！相手の表側表示のカードと相手の墓地を1枚ずつ対象！それらを、除外する！」

「!!?」

水面のカードを根こそぎかつさらうつもりの雷鬼。

だが、水面もそれを許しはしなかった。

「くうく仕方ない！セットカードオープン！カウンター罠《神の通告（つうこく）》！モンスター効果の発動を無効にし、破壊するぜ!!」

水面がセットしていたのは、2枚ともモンスター対策。

《強欲なウツボ》のドローで引いて来たのは信じられない程に強かった。

ライフを1500も失うが、モンスターへの対抗策としては最高峰。

水面のライフ6500。

だが、雷兎のモンスターは空になった。

『おっと！せっかく出した切り札があっさり対処された！これはピンチかー!?』

不安を掻き立てるギーガーの解説。

普通はその通りなのだろう。

だが、雷兎はここで笑った。してやったりと言わんばかりに。

「いいや、むしろありがたい！みなもっちゃんが引き強くて良かった！」

「なん…だと」

明るくなる雷兎。水面は身構える。

が、自分を守るカードは今は無い。

「ファンファンは相手によって破壊された場合、種族・属性が同じ電腦堺モンスター2体を特殊召喚出来る！」

「なっ!?!」

不死鳥の名を体現するかのような効果。

灰になったファンファンの亡骸から2体のモンスターが。

「俺はデツキから《電腦堺多ー多々(でんのうかいちーチイチイ)》を2体特殊召喚！」

「同じモンスターを2体…？またエクシーズか…？」

「いいや、違うね！レベル3モンスターが特殊召喚されたタイミングで、墓地にある《電脳堺姫―娘々》が効果を発動！自身をチューナーとして特殊召喚する！来い、にやんにやん！お前の本当の力、見せてくれ！」

四つ足の獣、ヂイヂイ2体の間に現れた機械少女。

側にいるヂイヂイ2体の頭を撫でている。

「チューナーになったにやんにやんと、2体のヂイヂイの3体をチューニング！」
にやんにやんが高く飛翔。

それに連なつて2体のヂイヂイも飛翔する。

にやんにやんの身体が電子へと分解し、その粒子はヂイヂイを包み込む。
ヂイヂイ達は一つになり、強い光を放つ。

そして、その光は九つの尾を持つ獣へと、姿を変えた。

「九つの尾をなびかせて 天より来るは気高き神。

シンクロ召喚。《電脳堺狐（でんのうかいこ）―仙々（シエンシエン）》。
神々しき九尾の狐。

静かに、そして気高く。

その狐は、何を見ているのだろうか。

電脳堺狐―仙々 レベル9

攻撃力、2800。

水面の手札、1枚

雷兎の手札、3枚

水面の盤面

モンスターゾーン 白鬨気海豚

魔法・罨ゾーン 無し

雷兎の盤面

モンスターゾーン 電脳堺狐―仙々

魔法・罨ゾーン 電脳堺門―朱雀

20話 誰が言った？

「…にやんにやんは自己特殊した場合、ゲームから除外される。ただ、にやんにやんはゲームから除外されると他の除外されているカード1枚をデッキに戻せる。これによつて、俺は最初に除外されたにやんにやんをデッキに戻す。」

プレイングミスが無いように、カードを確認しながら効果を使つていく雷兎。不安げな表情の雷兎に、仙々は尾を1つ近づけ、頬を撫でる。

「…よし、待たせたなみなもつちゃん！バトルフェイズ！」

仙々を眺めて数秒呆けていた雷兎だったが、気持ちを切り替えたのか水面に向き合いい、バトルフェイズを宣言する。

「来るか、雷兎つち！」

セットの無い水面。白鬮気海豚だけが頼みの綱である。

「シエンシエンの攻撃する時、シエンシエン自身の効果を発動。ゲームから除外されているモンスター1体を墓地に戻せる。」

これによって、《電腦堺媛（でんのうかいえん）―瑞々（ルウルウ）》を墓地に戻す！
「リソース回収…強いな。」

「シエンシエンの本当の強さはこれじゃない！シエンシエンが場にいる限り、お互いのフィールドから墓地に送られるカードは、墓地に行く事なくゲームから除外される！」

「んなつ?!マジかよ?!」

水面のデッキは墓地に水属性があつてこそその強さを持つ。

故に、シエンシエンは水面にとって大敵だ。

ザシユザシユザシユ！と幾多もの尾に貫かれる白鬨気海豚。

哀しい鳴き声と共に、白鬨気海豚は散っていった。

水面のライフ、6100。

「くそつ、まさか除外されるとは…」

「俺はこのままエンドフェイズに入り、ダイダイの効果処理を行う。墓地にいるルウを手札に加えてターン終了！」

盤面は無く、手札は1枚。

相手の場には大敵のシエンシエン。

絶望的だ。

だが、水面も簡単に諦める訳にはいかない。

「俺のターン、ドロー…来た！やっぱこのデッキは俺に答えてくれている！」

「マジか！」

決死のドローを見て、笑顔を取り戻す水面。

水面の逆襲が始まる。

「まずはスタンバイフェイズ、墓地にある《ブレイクスルースキル》の効果！このカード自身を除外して、シエンシエンを対象！効果を無効化だ！」

「やっべー忘れてた！」

警戒を怠り、すっかり忘れていた雷兔。

なすすべなくシエンシエンを無力化されてしまう。

「メイμφェイズ！俺は《揺海魚（ようかいぎよ）デッドリーフ》を召喚するぜ！
ゆらゆらと揺れる魚。」

水面が喜ぶのは、理由がある。

「こいつは召喚・特殊召喚時に魚族をデッキから墓地に送れる。これによって、俺は《伝説の白タウナギ》を墓地に送ろう。そして、今墓地に送った白タウナギを対象に、2枚目の《白の水鏡（ホワイト・ミラー）》を発動さ！」

「うげえっ！なんつー引きだよ！」

墓地にある白タウナギを蘇生し、かつデッキから同名を手札に。

極限に手札は少ないが、ついに水面も切り札を呼ぶ用意が出来た。

「場にいる白タウナギとテッドドリーフでチューニング……！」

2体の魚が地面へと潜り、姿を消す。

すると、そこから泡がコポコポ出てくる上、何かの鳴き声が響き、近寄ってくるではないか。

「待たせたな相棒！海よりいだよ！」

その美しき姿、大いなる巨躯！シンクロ召喚！レベル8！

《白闘気白鯨（ホワイト・オーラ・ホエール）》！！

ザッパーーーン！！

地面から白く美しき鯨が飛び出してくる。

すぐ地中に潜るが、その衝撃で大量の水が跳ね、会場の観客に水が掛かる。

「ぶへえっ！濡れたぞ?」「うそっ、しよっぱい!」「きゃー！びしょびしょ!」「きんもちい……」「水面の野郎!」

水を被った観客達は非難轟々。

反対側かつ近くにはいなかった凧音達は深く安堵をする。

「ふふふ、凄いわね、彼の切り札。本物とはいえソリッドビジョンであそこまで影響を及ぼすなんて。」

「あつちにはなくて良かったです…びしょびしょになっちゃう…」

「びしょびしょ…／＼／＼／＼」

凜音がボソツと呟いた言葉を耳にした光夜。

少し耳が赤くなっている。

「…どうかしたのかしら、暁君？」

なんとなく、光夜をジト目で見つめる凜音。

「いや、なんでもない…向こうは大変だよなって…」

「ふうくん…?」

騒ぎになってる方を見ながら答える光夜を、怪しげに見つめる凜音であった。

「ホエールのシンクロ召喚時！相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

「くそつ、やられた！」

白鬮気白鯨が口から放射した水のレーザーがシエンシエンを貫く。

なすすべなど無く、シエンシエンは破壊される。

「さあ、バトルだ！いけ！ホエール！」

巨大な鯨が、雷兎に迫る。

「フィールドの永続罨《電腦堺門―朱雀（チュチュエ）》の効果を発動！フィールドの表側のカードを対象に取り、除外されている自分の電腦堺カード2枚をデッキに戻す事で、破壊する！戻すのは電腦堺姫―娘々、電腦堺門―青龍！」

門から飛んできた業火に焼かれる白鬮気白鯨。

攻撃は止まった。はずだった。

「甘いぜ！白鬮気白鯨は相手に破壊されると、墓地の水属性モンスターを除外して特殊召喚出来る！《白鱒（ホワイト・モーレイ）》を糧に甦り、攻撃を続行しろ！ホエール！」

「うっそだろお?！」

再び姿を現した白鬮気白鯨。

現れたその勢いで頭から雷兎に突撃。

体格差と衝撃で雷兎は吹っ飛ばされる。

雷兎のライフ、5200。

「ぐっ、やるな…」

「どうだよ雷兎っち！俺はこのままターンエンドだ！」

まだ墓地には水属性が3体。

余裕の表情のまま、水面はターンを渡す。

水面の手札、1枚

雷兎の手札、3枚

水面の盤面

モンスター 白鬨気白鯨

魔法・罫 無し

雷兎の盤面

モンスター 無し

魔法・罫 電脳堺門―朱雀

「うわあ、いったそうだなあ…」

「何を呑気な！天童君大丈夫なのかしら!？」

白鬨気白鯨に頭突きされた雷兎を見て呑気な発言をする光夜と、慌てる凜音。

だが、その場で慌てるのは凜音だけだ。

「まあいくらソリッドビジョンだからとはいえど、衝撃はある程度伝わるからなあ。まあ人体に影響及ぼす程では無いだろ。」

とは、辰覇の発言。

「まあ、あれだけ水しぶき生み出せるモンスターだからちよつと怖いけどねえ。でも雷兎ちゃん笑ってるし大丈夫よ。彼を信じてあげなきゃ。」

「そ、それはそうですけど…」

辰覇、涅槃に促され、ハラハラしながらも静かに観戦する事にした凜音だった。

そして、視点は綺羅麗が真二の超融合によってモンスターを失った直後に。

「ふふふ、素晴らしい…ええ、なんとも素晴らしいのでしよう！僕は今、デュエルをしているー！」

それは、突然の事。

自分のモンスターを失ったはずなのに、綺羅麗は喜んでいる。

真二は理解出来るはずもなく、思わず引いた。

「お、お前大丈夫か？頭おかしくなったんじゃないのか?！」

心配するというより、気持ち悪がっている。

だが、綺羅麗は意に介する事なく、楽しそうに発言を続ける。

「ふふふ、失礼！しかし、君は自分で口にする通りのデュエリスト！良いプレイングを見せてもらっていますねえ！しかし、僕はそれを乗り越えなければならぬ！お見せしましょう！『本当の僕』を！」

意味不明な発言だ。

誰しもが思う。

だが、そんな感情も、綺羅麗の見せたカード一枚で、覆る。

「手札からフィールド魔法発動！《呪眼領闘（じゅがんりょういき）》——パレイドリア」
 「！！」

「は……？じゅ、呪眼……？」

まさかの魔界劇団ではない、別種のカード。

真二は理解が出来なかった。

「パレイドリアは発動時の処理として、デッキから呪眼モンスターを一枚手札に加える！僕が手札に加えるのは、《呪眼の死徒（じゅがんのしと）——サリエル》！」

「う、嘘だろおい！なんで呪眼なんかが入って!？」

狼狽えるのは真二だけにあらず。

観客達もどよめきが広がる。

ペンデュラムデッキはその性質上、ペンデュラムカードの採用比率が多いために、他

のテーマは入れにくい事があるためだ。

「はて、何をおっしゃるのか。僕はいつ『このデツキが魔界劇団』だと言いましたか?」
「えっ…?」

「僕のこのデツキは『呪眼劇団』! さあ、召喚しましょう! サリエルを!」
貴族らしき男を召喚する綺羅麗。

その男、怪しく笑う。

「このサリエルは召喚に成功した時、デツキから呪眼カードを手札に加える! 持つてくるのは、装備魔法《セレンの呪眼》! そしてこのセレンの呪眼をサリエルに装備しましょう!」

片目にモノクルのような、禍々しい物を取り付けるサリエル。

その眼が、紅く輝く。

「セレンの呪眼を装備しているモンスターは戦闘・効果では破壊されず! 更に相手のカード効果の対象にもならない! そして、セレンの呪眼を装備したサリエルの特殊効果! 特殊召喚されている、相手のモンスターを対象に、破壊します!」

「くっそおお! 僕のトリファイオヴェルトウムが!」

切り札級の捕食植物トリファイオヴェルトウム。

特殊召喚を無効には出来ても、耐性は無い。

サリエルの呪眼から放たれた光線が、トリフィオヴェルトウムを消滅させる。

「くくく、装備モンスターの効果、もしくは呪眼魔法・罠が発動する度にセレンの呪眼によって僕はライフを500失う。しかし、その数値分、装備しているサリエルは攻撃力をアップ！さあバトルです！サリエルでダイレクトアタック！」

「ぐぎやああああ!!!」

真二に飛び掛かり、その鋭い腕で切り裂くサリエル。

たまらず真二は悲痛な叫び声を上げる。

真二のライフ、5900。

「僕は手札を1枚伏せてターンを終了！エンド時に、ビッグ・スターの効果で伏せたカードは墓地にいけますが、まあ致し方ないでしょう！さあ、あなたのターンです！」
強固な固さを持つサリエルと、伏せカードが1枚。

手札もフィールドもほぼ枯れた、真二のターンが来る。

綺麗麗の手札、2枚

真二の手札、1枚

綺麗麗の盤面

モンスター 呪眼の死徒—サリエル

魔法・罠 フィールド魔法 呪眼領域パレイドリア セレンの呪眼 伏せ1枚

ペンデュラムゾーン 魔界劇団―ワイルド・ホープ
真二のフィールド 無し

魔界劇団―メロー・マドンナ

21話〈霸王の因子〉

「僕のターン！ドロー！」

めげる事なく、真二は自分のターンへと入る。

「スタンバイフェイズ！」

「おっと、スタンバイフェイズに入った時。サリエルは破壊効果を使用した次のターンのスタンバイフェイズに自分のカードを破壊するデメリットがあるのです。つまり今、僕は自分のカードを破壊しなくてはならない。これにより、僕は《呪眼領域―パレイドリア》を破壊する事にします。そして、《セレンの呪眼》の効果によって、ライフを500失う代わりに装備モンスターのサリエルの攻撃力を500上昇。現在攻撃力2600です。」

呪眼は強力な効果、耐性を持つが、ライフはガリガリと削れていく。

綺麗麗のライフ、残り6000。

「ふん、せっかく破壊された時に効果を発動出来るカードが他にあるのにそれを壊すのか。まあいい。僕は墓地にある《捕食植物キメラフレッシュ》の効果で、デッキから融合、

フュージョン魔法カードを手札に！僕は再び《超融合》を手札に加える！」

「おっと、それは大変ですね……」

再び加えられた超融合。

強固な耐性を持つ《呪眼の死徒―サリエル》とて、その力には抗えない。

「それだけじゃないぞ！墓地から更に《捕食植物コーデイセツプス》の効果！自身をゲームから除外して、墓地にあるレベル4以下の捕食植物モンスターを2体特殊召喚だ！《捕食植物セラセニアント》《捕食植物オfris・スコーピオ》を特殊召喚！」

「これは凄い！手札を消費する事なくモンスターを2体並べた！これは繰りかえしか
!？」

「厳しいのは間違いないですね……まあ予想はしていましたが。」

厳しいとは言いが、それでも笑顔は絶やささない。

その表情は、真二の勘に触った。

「あくまで余裕は崩さずか……良いだろう、泣いて詫びろ！手札の《捕食植物ドロソ・フィルムヒドラ》をコストに、今加えてきた超融合を発動するぞ！素材とするのは僕のセラセニアントと、お前のサリエルだ！」

「ああ、サリエル……なんと悲しき結末……」

融合素材となり、消えていくサリエルを悲しい表情で見る綺羅麗。

そして、2体のモンスターは混ざりあい、一体の竜を呼び出す。

「出番だ！僕の前に立つ憎たらしいあいつを喰らい尽くせ！」

融合召喚！《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》!!」

毒々しい姿をした、黒と紫の竜が姿を現す。

その攻撃力、2800。

場にいるオfris・スコープと共に攻撃すれば、4000ダメージにもなる。

「そして！今融合素材になったセラセニアントが墓地に送られた事でプレデターカードを手札に加える！持ってくるのは装備魔法《捕食接ぎ木（プレデター・クラフト）》！そしてそのまま捕食接ぎ木を発動し、墓地にいる捕食植物を特殊召喚する！甦れ、《捕食植物トリフィオヴェルトウム》！」

竜の姿を持った植物の化物が、甦る。

その攻撃力、3000。

スターヴ・ヴェノム、オfris、トリフィオヴェルトウム。

3体の総攻撃力、7000。

綺羅麗のライフを上回った。

「コーデイセツプスの効果を使うと通常召喚は出来ず、融合モンスターしか特殊召喚が出来ない。だからオfris・スコープの効果は使えないし、手札にいるモンスター

を召喚する事も出来やしない。だけどどうだ？お前の頼みの綱のサリエルは消え、モンスターはいない！さあ、覚悟はいいかよ繰崎いー！！」

『繰崎ピーンチ!! 守りが無い上にライフ以上のダメージ量は確定的！なんとか出来るのかよ!!』

「……………」

状況は、完全に真二の有利。いや、勝利。

そして…

「バトルだあ！オフリス・スコープオ攻撃い！繰崎にダイレクトアタックだあー！」

まずは小物から、綺麗麗へと飛び掛かる。

だが、それは綺麗麗にとっては悪手だった。

「お待ちしておりました！セットカードオープン！」

「なにっ!?なんだ！ここにきてリバース!? 攻撃反応型か!？」

今まで黙秘されてきた伏せカードがついにオープン。

真二は最大限の警戒をする。

「残念！僕が発動するのは、《揺れる眼差し》！お互いの全てのペンデュラムゾーンのカードを、破壊します！」

「…は？」

この局面で意気揚々と発動するにとしては、あまりにも微妙。真二は思わず呆けた声が出る。

「そして揺れる眼差しは破壊した枚数によつて効果を追加していきます。まずは1枚破壊した事により、相手ライフに500のダメージを！」

「くつ、いつてえなあ!!」

とは言うが、微々たるダメージ。決して痛くはない。

真二の残りライフ、5400。

「そしてこれが目玉！2枚破壊の効果！デッキからペンデュラムモンスターを手札に加えます！僕が手札に加えるのは、《アストログラフマジシャン》!!」

「アス…トロ…なんだよそのカードは…？」

その場にいた誰もが知らないカード。

果たして、何故そのカードを手札に加えるのか。

それが、今わかる。

「ではその後の効果処理に入りましょう！まずは破壊された《魔界劇団ワイルド・ホープ》の効果！デッキから魔界劇団モンスターを手札に！」

「だからなんだ！攻撃は、止まってねえぞ！」

迫るオフリス。

だが…

ピタッ…

「な、なんだ…何が…どうして…おい…

どうしてオフリスは動かない…」

急に動きを止め、なにかを警戒しだすオフリス・スコープオ。

狼狽える真二。

「ワイルド・ホープの効果にチェーン。手札に加えたアストログラフ・マジシャン。このカードは、自分のカードが戦闘・効果で破壊された場合、手札から特殊召喚する効果を持つています。これにより、そのモンスターの攻撃は一旦中止となりました。ええ。」

時空を歪ませ、突如現れし魔術師。

守備力、2000。

オフリス・スコープオでは、倒せない。

「さらに、このアストログラフ・マジシャンは自分の破壊されたモンスターと同名カードを1枚、手札に加える。アストログラフの効果で《魔界劇団―メロー・マドンナ》を、ワイルド・ホープの効果で《魔界劇団―エキストラ》を手札に加えるようにしましょう。」

オフリス・スコープオの攻撃を止めるだけにとどまらず、手札を2枚も増やした綺羅麗。

この時点で、綺羅麗はこのターン負ける事は、無い。

「くつつつっそー!!!なんだよそのモンスターは!!見たことねえぞ!!」

知らないカードの登場によってシヨットを防がれ、たまらず地団駄を踏む真二。

「繰崎君まで私の知らないカードを…あのモンスターはいつたい…?」

綺羅麗の出したアストログラフ・マジシャン。

それは凜音すら知らないカードであり、困惑の表情。

「…出して来たか。『霸王の因子』」

「霸王…?何か知ってるの?暁君。」

ボソツと呟く光夜の言葉を聞き取り、凜音は光夜の方を見る。

「…俺もそこまで詳しくは知らないんだ。なんせ、俺達の中で、あいつだけ中学生になつてから知り合つたからさ。全部の謎がわかつた訳じゃねえんだ。」

「そ、そうなの?あなた達って、いつから知り合つてるの?」

「俺と辰覇は小学二年生くらいから。心と影善は四年生くらいか?雷兎とは五年生くらい。あと聖も四年生くらいか。」

「そうなのね…聖さんとは昔からよく会っていたのに、そんな事教えてくれなかった」

「友達の友達など、興味無かろう。ましてやお前は特にだろう、白皇女史。」

「…それで、その霸王の因子とはいったい何なのかしら？」

「…あのマジシャンは、大いなる霸王の根幹で、条件を整えるとその霸王が現れる。そう綺羅麗は言つてたのさ。それ以上はすまんがわからん。」

王牙の弟子達は、やはり普通ではない。

これから先、それをよく知る事になる凜音と、観客達。

そして、場面は再び綺羅麗達へ。

「くそつ、構うもんか！スターヴ、そのくそつたれなモンスターを八つ裂きにしろ！」

怒りを乗せた咆哮。真二はスターヴ・ヴェノムに命じ、攻撃をさせる。

「ふむ。出てきて早々済まないが、退場してもらおうとしましょう。ありがとう、アストログラフ。」

綺羅麗の声に頷き、バリアーを張りつつも無惨に破壊されるアストログラフ。

「くらえ！トリファイオヴェルトウムのダイレクトアタックだ！」

トリファイオヴェルトウムに切り裂かれ、大ダメージを受ける綺羅麗。
残りライフ、3000。

「くつ…ふ、ふふふふふ!!ええ、楽しいですねえ！ギリギリのデュエルをしていますねえ！でも！僕は負けませんよ！」

ニタリ。そう表現するのが最適な、不気味な笑み。

ゾクリ、と真二だけではなく、観客達の背筋が凍る。

気持ちが悪い。

そう思わずには、いられないのだ。

「くつ、ぼ、僕はカードを1枚伏せてターンは終わりだ！さあ、越えられるもんなら越えてみるよ！」

「もちろんですとも！さあ、これが我々のラストターン、ドロー！」

やけくそになりながらもターンを渡してきた真二に威勢よく答える綺羅麗。

そして、彼は言う。

これがラストターンだと。

真二の手札、0枚

綺羅麗の手札、5枚。

真二の盤面

モンスター 捕食植物オフリス・スコーピオ 捕食植物トリファイオヴェルトウム ス

ターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン

魔法・罫カード 1枚

綺羅麗の盤面

モンスター 無し

魔法・罫カード 無し

真二のライフ 5400

綺羅麗のライフ、3000

22話〈第一陣、決着〉

「悪いなみなもつちゃん。これが、俺達のラストターンだ。」

突如として、ラストターンを宣告する雷鬼。

確かに手札はまだ枚数はあるが、時期尚早ではないのか。

誰しもそう思わずにはいられない。

「…その言葉、もしその通りにならないなら恥ずかしい思いしちゃうぜ雷鬼っち。」

「…しねえよ。だって、今この手札だけで、勝つすべは決まってるからな。」

「…なんだって?」

水面の盤面は白鬮気白鯨のみで、破壊には強く、攻撃力も高い程度。

だが、どうするのだろうか。

「俺のターン、ドロ…」

俺は手札から、《電脳堺媛―瑞々(ルウルウ)》を、フィールドの《電脳堺門―朱雀(チュエ)》を対象に取って発動する。デツキから《電脳堺姫―娘々(にゃんにゃん)》を墓地に送り、ルウルウを攻撃表示で特殊召喚。更に、デツキから《電脳堺都―九龍》を手札に。続いて墓地にある《電脳堺門―青龍》を除外してその効果。デツキから《電脳

堺悟ー老々（ラオラオ）を手札に加えて、もう一枚のルウルウを墓地に送る。そして、ラオラオの効果。チュチュエを対象に、デツキから更になんにやんを墓地に送りつつ特殊召喚。更にラオラオの効果。墓地にいる《電脳堺多ー多々（でんのうかいちーヂイヂイ）》を特殊召喚する。レベル3モンスターの特殊召喚時、墓地にあるにやんにやんが効果を発動。チュウナー扱いで特殊召喚。にやんにやんは攻撃表示で出す。」

『これは凄い！僅か2体のモンスターの効果から、4体も展開したぞ！さあここからどうなる！』

怒濤の勢いで展開した雷兔。

その展開は、まだ終わらない。

「墓地にあるチュチュエの効果。ゲームから除外し、ヂイヂイを対象にして、そのレベルを3上げる。レベル6のヂイヂイ、ラオラオの2体でエクシーズ！再びいでよ、《電脳堺風ー風々（ファンファン）》！」

再び現れる風々。

今度は止める手段は、無い。

「ファンファンの起動効果。エクシーズ素材を2つ取り除き、そっちのフィールドの《白鬮気白鯨》と、墓地の《白棘☒（ホワイト・ステイングレイ）》をゲームから除外させてもらおう。」

「くそつ、ホエールが…」

フィールドも墓地も奪われ、切り返す事さえも困難な水面。

だが、雷兎はそれでは終わらない。

「最後に、墓地に存在する《電腦堺狐ー仙々》の効果を起動。墓地の種族、属性の異なるモンスター2体を除外し、特殊召喚ができる。《電腦堺獣ー鷺々》、《電腦堺彡ー彡々》を除外。甦れ、シエンシエン。」

切り札級の性能を持ちながらも自身で蘇生するシエンシエン。

これによって、全モンスターの攻撃力が、水面のライフを上回った。

「バトルフェイズ！にゃんにゃん、ファンファン、シエンシエンの順にダイレクトアタック！」

「うわあああああ!!!」

電腦堺姫ー娘々 1500

電腦堺凰ー凰々 2600

電腦堺狐ー仙々 2800

計6900。

水面のライフ、6100↓ー800。

勝者 天童 雷兎。

だが、勝利したはずの雷兎はどういう訳か、とても悲しい表情をしていた。

そして、綺羅麗の方は…

「ふふふ、行きますよ！僕のラストターン！まずは再び《呪眼の死徒サリエル》を召喚！

このカードの召喚成功時、デッキから呪眼カードを手札に。僕は再びの《セレンの呪眼》をサーチして、サリエルに装備します。そしてサリエルの効果。そちらの《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》を破壊します。」

「くっ、スターヴ…！」

前のターンと同じ行動。

だが、それは的確に真二に多大な痛手を食らわせた。

サリエルの呪眼から放たれた光線。それはスターヴを撃ち抜き、破壊した。

「処理後、セレンの呪眼によつてライフを糧に、サリエルの攻撃力を500上昇します。」

少ないライフだが、更に削っていく綺羅麗。

残りライフ、2500。

「そして、魔法カード《眷現（けんげん）の呪眼》！呪眼トークンを1体特殊召喚！セレンの呪眼があるなら、更にもう1体、計2体特殊召喚！」

「呪眼モンスターが3体…だと…」

手札2枚しか使用していないのに、強烈な展開。

スターヴ・ヴェノムは破壊されると特殊召喚された相手モンスターを全滅する効果を持つていたのだが、通常召喚されたサリエルに破壊され、恐れる必要は無くなった。

「そして、呪眼魔法が発動したのでまたセレンの効果でライフを500消費し、攻撃力を500上昇…

さあ！僕は呪眼の死徒サリエルと呪眼トークン2体をリンクマーカーにセットする
としましょう！」

「リンクマーカー…まさか！」

「出番です！呪眼に秘められたその力、全てを解放せよ！リンク召喚！リンク3！《呪眼の王 ザラキエル》！」

2体のトークンを糧に姿を変えた、二元サリエル。

その姿は完全に化物と化していた。

その攻撃力、2600。

『おおっと！これは珍しい！リンクモンスターの、しかも高ステータスモンスター！』

「これこそが繰崎の切り札なのだろうか！」

「ザラキエルのリンクマーカーは下側に2ヶ所。それにより、EXデツキから2体のペンデュラムモンスターを呼ぶ事が可能です。」

リンクモンスターは、基本的にEXモンスターゾーンにしか出せないモンスターだが、そのカードに記されているマーカーの先にEXデツキから出るリンクモンスター、ペンデュラムモンスターを出す事が出来るようになる。

これによって、EXモンスターゾーンから一体しか出せないペンデュラムモンスターを、2体出せる。

その差は明白であり、もちろん強力だ。

「そして、僕は手札から《魔界劇団―メロー・マドンナ》を設置。ライフを1000支払って効果を発動。デツキから《魔界劇団―デビル・ヒール》を手札に！」

ついにライフの残りが1000にまで下がった綺羅麗。

だが、用意は既に終わっている。

「そして、もう片方のペンデュラムゾーンに《魔界劇団エクストラ》を設置し、自身の効果により特殊召喚。その後、エクストラをリリースして《魔界劇団ワイルド・ホープ》を設置。ワイルドホープのペンデュラム効果を起動！メロー・マドンナのスケールを9

に変更！」

これによって、綺羅麗は3から9の魔界劇団モンスターを特殊召喚可能に。

そして…

「再び揺れるは魔の振り子…陽気な劇団最後の登場！

ペンデュラム召喚！僕が呼ぶのは、3体のモンスター！

手札から魔界劇団―デビル・ヒール！EXデッキから《魔界劇団―ビッグ・スター》と
《魔界劇団―メロー・マドンナ》！

ズラリと並ぶ、そうそうたるメンツ。

特にデビル・ヒール。

その攻撃力は、脅威の3000。

そして、メロー・マドンナ、攻撃力1800。

ビッグ・スター、攻撃力2500。

『で、出たー！！凄まじい展開！凄まじいパワーの羅列！これがペンデュラム召喚の強さだ！相浦、この状況をどう突破する!!』

(くっ、トリフィオヴェルトウムが特殊召喚を無効に出来るのは融合召喚されている場合のみ…奴め、やっぱりわかっていたか…！)

そう、トリフィオヴェルトウムは1度場を離れ、墓地から蘇生されている。

それ故、厄介な特殊召喚封じは、今は持つて無いのだ。

「そして、ビッグ・スターの特殊召喚成功時には貴方は魔法・罫を発動出来ない！それだけではなく！デビル・ヒールは特殊召喚成功時、自分の魔界劇団モンスターの数につき1000、モンスター一体を弱体化出来る！僕はこれでトリフィオヴェルトウムの攻撃力を3000ポイントダウン！」

「なっ！し、しまつた！」

トリフィオヴェルトウムの攻撃力は、0。

ダメージが素通りしてしまう。

「そしてさらに！ビッグ・スターの効果を起こ動！デツキから魔界台本カードをセット出来る！これにより、僕は《魔界台本オープニング・セレモニー》をセットし、そのまま発動！フィールドの魔界劇団モンスターの数につき500のライフを回復します。今は3体存在するため、合計1500回復！」

わずか1000から、2500に巻き返す綺羅麗。

さらに…

「魔界台本の効果を発動したため、メロー・マドンナの効果も誘発。デツキからレベル4以下の魔界劇団を特殊召喚出来ます。僕はデツキから《魔界劇団―ファンキー・コメディアン》を特殊召喚。」

メロー・マドンナが呼んできたのは、太つちよなモンスター。攻撃力、僅か300。このモンスターを呼んだのは、もちろん理由がある。

「このコメディアン、特殊召喚成功時に自分フィールドの魔界劇団モンスターの数につき300、自身の攻撃力を上昇。4体存在するので、攻撃力は1500に。そして、コメディアン起動効果。自身は攻撃出来なくなるものの、自分の他の魔界劇団モンスター一体に、自身の攻撃力を加算してくれます。デビル・ヒールの攻撃力をアップ！その攻撃力、なんと4500！」

お目に掛かる事すら珍しい、高攻撃力。圧巻である。

全てのモンスターで攻撃する必要もなく、真二のライフは0になるだろう。

「これで最後。墓地にある《セレンの呪眼》の効果を発動。ライフコストを1000払いつつ他の呪眼魔法・罫を1枚墓地から除外して、フィールドにセット出来る。《呪眼領域パレイドリア》を除外して、セレンの呪眼をセット。そして、そのままザラキエルに装備！」

呪眼が妖しく鮮烈に光り、咆哮するザラキエル。

せつかく得たライフではあるが惜しくはない。

綺羅麗のライフ、残り1500。

「さて、それではバトルフェイズ！デビル・ヒールで攻撃力0のトリフィオヴェルトウムを、攻撃！」

ドシン！ドシン！と音を立てて動くデビル・ヒール。

だが、それを聞いた真二は、笑ったのだ。

「掛かった…掛かったよ…へへへ…このデュエル、僕の勝ちだ！」

突如、勝ちを宣言した真二。

綺麗な表情が、変わる。

「セットカードオーブン！！《捕食計画（プレデタープランニング）》！！デツキから《捕食植物コーデイ・セツプス》を墓地に送って発動！フィールドの全てのモンスターに、捕食カウンターを乗せる！」

捕食カウンター。

捕食植物の扱うカウンターであり、これが乗ったレベルを持つモンスターは、全てのレベルが1になる。

だが、今発動した理由は、そこではない…

「トリフィオヴェルトウムは、捕食カウンターの乗っているモンスター全ての元々の攻撃力を追加する！」

捕食植物オプリス・スコープオ 1200

呪眼の王 ザラキエル 2600

魔界劇団―デビル・ヒール 3000

魔界劇団―ビッグ・スター 2500

魔界劇団―メロー・マドンナ 1800

魔界劇団―ファンキー・コメディアン 300

その合計数値、11400。

攻撃力0のトリファイオヴェルトウムに、その数値が上乘せされる事になる。

このままなら、反射ダメージで綺羅麗は敗北する。

しかし…

「…ええ、貴方ならそのカードを握っていると、思っていました。ザラキエルを出して、本当に良かったです。」

「…なんの話だ？」

話が繋がらない。

真二にはそあ感じたらしく、首を傾げる。

「僕は、その捕食計画の効果に、ザラキエルの効果をチェーン発動！フィールドのカード1枚を対象とし、破壊出来る！破壊するのはもちろん、トリファイオヴェルトウム！」

「な、なんだとお!？」

捕食計画も、トリフィオヴェルトウムも効果を把握していた綺羅麗。

トリフィオヴェルトウムを破壊しに掛かり、真二には防ぐ手立ては無い。

ザラキエルの呪眼が強い光を放つ。

と、トリフィオヴェルトウムは朽ち果て、消滅した。

「さて、捕食計画の効果でお互いのモンスター全てにカウンターが乗り、レベルを持たないザラキエルを除けば全てレベル1に変更ですか。まあ良いでしょう。

ザラキエルの効果の処理後、セレンの呪眼によってライフを500失い、ザラキエルの攻撃力を500上昇。その攻撃力、3100!」

せつかく増えたライフだが、惜しげもなく削る綺羅麗。

残りライフ、1000。

「攻撃宣言時に相手のモンスターの数が変動したので、デビル・ヒールは攻撃対象を切り替えられる。デビル・ヒールでオプリス・スコープオに攻撃!」

「させるかよお!墓地にいる《捕食植物ドロソフィルム・ヒドラ》の効果!捕食カウンターを乗せたモンスター一体をリリースして、このモンスターを特殊召喚!デビル・ヒールを食ってなあ!」

「おっつ!？」

現時点最強攻撃力のデビル・ヒールを食い破りながら現れたそのモンスター。守備力2300と、かなり高い。

「ならばザラキエルで今現れたドロソフィルムを攻撃しましょう！」

「ドロソフィルムは、墓地の捕食植物を除外して、モンスターの攻撃力を500下げる効果を持つ！墓地にある《捕食植物ダーリング・コブラ》を除外して、ビッグ・スターの攻撃力をダウンする！」

セレンの呪眼を装備したザラキエルはカード効果の対象に取る事が出来ない。

そのため、真二は現状最も攻撃力の高いビッグ・スターを弱体化。攻撃力2500↓2000

そして、ドロソフィルムはザラキエルによって粉碎される。

「続いてビッグ・スターでオフリスに攻撃。」

「ぐっ、壁が…」

手札も魔法・罫もモンスターも、これで全て無くなった真二。
あるのは、その身一つ。

ライフ5400↓4600

「メロー・マドンナ、ダイレクトアタック！」

「ぐぎやああああ!!」

「そう！サリエルはセレンを装備し自身の効果、眷現の発動、それぞれで攻撃力を500ずつ上昇、攻撃力を2600に上げていた！つまり、このザラキエルは「2回攻撃」を持つている！」

計画通り。

ザラキエルは、狂気に満ちた笑顔を真二に見せる。

「や、やめろ…おい、嘘だろ…僕は奴等とはちがう…」

「さあ幕引きです！ザラキエル！彼にとどめを！」

「やめろおおおおお!!!」

叫ぶ真二を嘲笑う、ザラキエルのダイレクトアタック。

2500↓→600

繰崎 綺羅麗VS相浦 真二

綺羅麗の勝利。

ギリギリだと言っておきながら、なんだかんだで綺羅麗は余力があった。

真二も水面も、とても良いデュエルをしていた。

だが、雷兎や綺羅麗達超天星は、それ以上だった。

その事実を、このデュエルを見ていた者達に深く刻みこむデュエルとなったのであった。

23話〈陰陽戦線〉

「負けた…」

ライフが0になり、敗北して床に尻をついて呟く水面。

そんな水面に、雷兎は複雑な表情をしながら近寄る。

「…すまん、みなもっちゃん。フェアじゃなか「だあー！！！！悔しいぜちくしょう！！」喋りだす雷兎の言葉を遮るかのように、水面は大声をあげる。

「なんだよ雷兎っち！見たことねえテーマだったぞ！あとで寮に戻ったら教えてくれよな！」

「えっ、あつ、おお…」

「次は負けねえぞ！覚悟しとけよ！」

予想外の言葉に、雷兎は戸惑い、水面はガツシリを握手をかわすと去っていく。しばしポカンとする一同だが、少しずつ、やがて多くの観客が拍手し、2人のデュエルを称えたのであった。

「相浦君、とてもいいデュエルになりました。観客も大盛り上がり。素晴らしいデュ

エルをありがとうございました。」

そして、綺麗麗も真二に近寄ると、お辞儀をして礼を述べた。

「…ふん、嫌味な奴だ。僕は諦めないぞ。またいずれ、お前を倒してやる。お前だけじゃない。『超天星』どいつもだ！覚えてやがれー！」

捨て台詞を吐き散らして、真二は走り去っていった。

『さあ！激動のデュエルが終わり、すぐ次のデュエルだ！対戦者はスタンバイしろー！』

ギーガーの呼び掛けに、次の対戦者達が動き出す。

「…よう、残念だったな。」

水面が会場から出た少し先で、花道が壁に背をつけて立っていた。

「いやあく負けた負けた！完膚なきまでに、つて奴だな！雷兎たちは多分まだまだ動けただろうし、ほんと悔しいぜ！」

あつけらかんと言つてのける水面。

悔しさよりも、楽しさの方が上だったのだろうか。

「…はっ、よく言う。本来のお前とは動きが違いすぎた。お前、レベル下げたデツキを

使ったな?」

「…バレたか。」

「当たり前だ。何年お前と腐れ縁やっていると思ってる。」

「そりやそうか。まあ流石に一年生の晴れ舞台おじやんにするのも良くないからな。とはいえ、全力でやりあってもそれはそれで良かったなとちよっぴり後悔だわ。」

「…お前、他の4人は勝つと思うか?」

「勝つね、間違いなく。お前と当たる影善つちも、見た目だけでなめるとやられるぞ。」

「…はっ、負けないさ。僕には、勝利の女神がついてるからな。」

「言うね。まあ期待してるぜ!楽しんでこいよ!」

花道の肩を叩き、気楽そうに去っていく水面。

その姿を眺める花道の眼は、冷たい。

「ふん、いいさ。せいぜいやつてやる。」

僕にも、負けられない理由があるんでね。」

水面に聞こえないであろうが、決意に満ちた言葉を残し、花道は会場へと向かう。

「あつーらいとー!きくららー!」

雷兎と綺羅麗が会場から出た通路で、パタパタと明るく走り寄るのは心。

その屈託のない笑顔は、先程までデュエルをして集中していた2人の気持ちをなごませる。

「おう心ー！」

「らいとー！」

「いえーい！」

両手でハイタツチをする、雷兎と心。

なんとも楽しげな雰囲気だ。

「2人とも凄かったー！綺羅麗なんて負けちゃうんじゃないかって心配だったんだからねー！」

「ええ、ほんとに負けるかなと思いましたが。でも僕も意地がありますからね。ほんの少し本気を出してしまいました。」

「俺はまだまだなあ、やっぱもう少し練習しとくんだった。電脳堺、受け取った時にも言われたけどやっぱ難しいわ。」

心からの言葉に、2人ともそれぞれの感想を口々にする。

「よーし、僕も頑張るぞー！いつてくるー！」

「おうよ、楽しんでこい！」

両手を広げ、無邪気な仔犬のように走っていく心。

雷兎も綺羅麗も、思わず笑顔だ。

「お疲れ様、2人とも。」

「よお影善。…いい眼をしてるな。やる気いっぱいって感じか。」

「いつておいで、影善。君なら大丈夫だ。君は強いんだから。ええ。」

普段とは雰囲気の違い影善を見て、2人は静かにエールを送る。

「ありがとう、2人とも。」

勝ってくる。」

『さあさあ、お次はこいつら！』

まずはAゾーンの挑戦者。

震える身体に決意の瞳！音乃木 之音（おとのぎ ののん）！』

ギーガーの紹介通り、おぼつかない足取りで歩く少女、之音。

その眼は今にも泣きそうなのに、どこか力強かった。

「音乃木さん…」

モニターに映る之音の表情。

凜音は、複雑な思いだ。

『対する相手は！待ってた奴らも多いだろう！』

入学早々学年のアイドルか！

『超天星』天宮 心（あまみや こころ）ー！』

「「きゃあああああ!!!心ちゃーん!!!」

ギーガーが心の名前を呼んだ途端、多くの女子生徒（中にはいくつかの男も）がきゃーきゃーと叫んだ。

「えええ!?な、なんなのこれ!?心さんどうしてこんなに人気者なの!？」

急激な大歓声に、凜音は驚愕せざるをえない。

「あらあら、凄い人気ね〜」

「あれ、知らなかったのか。心は有名人だぜ。」

「有名人!？」

テレビやニュースを全く見ない訳ではないが、そんな事はまるで知らなかった凜音。

驚くばかりである。

『天宮 心！なんと一部カードのデザイナーとして巷では有名人！そんな奴が獅子神

「ほえっ!?!」

急に大声で呼ばれ、心は驚く。

その声の方にいるのは、之音。

「心ちゃん…私、負けないよ…絶対に、勝つんだから…」

今にも泣いてしまいそうな思い詰めた表情をしながら、之音は勝つと告げる。

その姿に、観客達はざわめく。

すると…

ふわっ…

「えっ、こ、心ちゃん…!?!」

心が、之音の両手を優しく握っていた。

驚く之音。

「もちろん!それくらいやる気出してもらわないとね!デュエルはいつだって真剣勝負だ!

負だ!

でもね之音。

今は、楽しもう!

「心ちゃん…!」

ニカッ、と八重歯を見せて笑う心の笑顔を見て、之音の表情が明るくなる。

そして観客達も更に熱量を増す。

「ふふふ、やはり心は人気者ですねえ。」

僕らはまるで前座ですね、ええ。」

光夜の横に現れた、綺羅麗と雷兔。

どこにいるのかはわかっていたようだ。

「おう2人とも。お疲れさん。」

いいデュエルだった。」

「まあ綺羅麗は危なっかしかったし雷兔はプレミ目立ってたけどな。」

「もう光夜と、辛口評価の辰覇。」

それぞれの優しさだ。

「ええ、僕もヒヤリとしました。ですがとても楽しかったです。」

「辰覇の言う通りだったぜ。まだまだ修練が足りなかったわ。」

「だが、勝ちも勝ちだ。経験をしつかりいかせよ2人共。」

2人を一言だけ論ずるのは、聖。

落ち着きのある言葉だ。

『よし！それじゃあ続いてBゾーン！』

挑戦者は二年生！クールな外見に熱いハート！

『雪花の貴公子（せっつかのきこうし）』、雪咲 花道（ゆさき はなみち）——！！』

「…ふん、あだ名なんてどうだっていい。デュエルには関係ないのだからな。」
くだらない。

そんな言葉が表情から読み取れる。

だが、そのあだ名こそ、彼の体現である。

『そして対するは『超天星』！地味な外見だが侮れない！黒崎 影善（くろさき かげよし）——！！』

一番影の薄い人物。

超天星とはいえ、見栄えはなく対して盛り上がりもしない。

わけではなかった。

そうではないが、会場は静まりかえった。

何故なら、影善は後ろ髪を結び、普段とは違う鋭い目付きをしているのだ。

まるで侍。

その気迫は、今日の対戦者の誰よりも、凄まじい。

「…へえ、ずいぶんイメージが違うな。」

やる気は十分みたいだな。」

「……………はい。残念ですが、倒します。完膚なきまでに。それが僕達『超天星』なので。」

大層な物言い。

だが、その言葉は脅しでも虚言でもない。

「…良いだろう。僕だって、まがりなりにもこの学園で戦ってきたんだ。負けはしない。全力でいく。」

『ようし、全員準備出来たな！さあ構えろ！始めるぞ！』

それぞれがデツキを取り出す。

カードを引き、手札を用意。

準備は、出来た。

『いざ尋常に！』

デュエル、スタート!!』

24話 集まれフレンズ、雪の降る世界に

「よし、さつきじやんけんで勝った僕のせんこーだー！メインフェイズー！」

最初に動いたのは、心。

まずは1枚のカードを取り出す。

「僕が最初に出すのはこの子！」

おいで！《レスキューラビット》！」

カードから飛び出してきたのは、ヘルメットを被った1羽のウサギ。

女子生徒がその可愛さに対してきやーきやーと黄色い歓声をあげ、そのせいかレスキューラビットはどこか上機嫌だ。

「いくよラビット！君の力を見せておくれ！レスキューラビットの効果を発動！デッキから同名の通常モンスターを2体呼んでくるよ！」

心の胸に飛び込んできたレスキューラビット。

心は抱き抱えたラビットを上空へと投げる。

ラビットが2つの光へと分かれて地上に降り、その2つの光はピンク色のふわふわし

たウサギへと姿を変えた。

「特殊召喚！《メルフィー・ラビィ》！」

「「きゃー！！！！かわいいー！！！！」

愛くるしいそのフォルム。

女子生徒からは大変人気なようで、会場は盛り上がる。

「はわわ、かわいい…メルフィー、初めて使われるのを見たわ…」

年頃の女の子らしく、凜音も例外に漏れずメルフィー・ラビィにはメロメロの様子。

「うむ、メルフィーはまだそこまで流通してはいないからな。完全なメルフィー

デツキを拝めるのは心だけだろう。奴がメルフィーをデザインしているのだから。」

「へえ…えっ…？」

「えへへ、ほんと可愛いなく君たちは…！よしよし！」

デュエルそつちのけで場に出たラビィを愛でる心。

デュエル中なのを忘れているのかもしれない。

「あ、あのう、心ちゃん…？」

「はっ！ごめんごめん！デュエル再開するよ！」

やはり忘れていたようで、テヘツと舌を出して謝る心。

そのあざとぎの前に強く言える女子生徒はそういないだろう。

「よし、それなら……2体のラビィでオーバーレイ！」

「オーバーレイ……」

「出番だみんな！みんなで楽しい集会だ！」

エクシーズ召喚！《森のメルファイーズ》！」

ラビィが一体減ったかと思いきや、小さな動物達が集まってきた。

ラビィは足元から出てきた切り株の上に乗って満足気に胸を張っている。

守備力2000。

「か、かかかかわいい……」

凜音が破顔してモニターに映るメルファイーズを眺める。

既にメルファイーの虜になっているようだ。

「あのエクシーズモンスターは心のデッキの要。あれは厄介だぞ。」

辰覇が厄介だと言う森のメルファイーズ。

果たして、その性能は……？

「森のメルファイーズは、エクシーズ素材を取り除いてメルファイーカードを1枚サーチするよ！メルファイーズの効果発動！デッキから《メルファイーのかくれんぼ》を手札に！そしてそのまま発動だー☆」

心が発動した永続魔法、メルフィーのかくれんぼが発動されると、辺りに茂みがいくつか現れる。

メルフィー達はの中へと潜り込み、時折顔を出して様子を伺う。

「くう、かわいい……………」

辺りをキョロキョロと見回し、興奮を隠せない之音。

もうデュエルどころでは無さそうだ。

「いやあ、ほんと恐ろしいですねえ、心のカリスマ性と扱うデッキは。」

之音の様子を見て、綺羅麗は眩く。

「…それだけじゃねえ。あの盤面自体厄介なのに、まだ手札一枚しか使ってねえ。動

くのはこれからだろうよ。」

綺羅麗の言葉に続くは辰覇。

辰覇でさえ、心の使うデッキを脅威と捉えている。

「続いて僕はカードを一枚セツト！」

エンドフェイズに移行して、手札から《メルフィー・パピィ》の効果を発動！特殊召

喚！

茂みから顔を出す、ふわふわの仔犬。

そのつぶらな瞳が之音を見つめる。

「さらにー！手札から《メルフィー・キャシイ》の効果発動！この子も特殊召喚するよー！」

続いて顔を覗かせるのは仔猫。

警戒心のまるでないその表情に、観客の女子生徒達は釘付けだ。

メルフィー・パピイ、メルフィー・キャシイ。

共に守備力100。

「さあ！僕のターンは終了だよ！君のデュエルを見せておくれよ！」

自信満々に、心はターンを終了する。

心の手札、残り2枚。

心の盤面

モンスターゾーン

森のメルフィーズ メルフィー・パピイ メルフィー・キャシイ

魔法・罨ゾーン

メルフィーのかくれんぼ セット1枚

く場面は変わり、花道と影善のデュエルく

「僕のターン。手札から魔法カード《ワン・フォー・ワン》発動。コストとして《六花精エリカ》を墓地に送り、デッキから《六花のひとひら》を特殊召喚。」

先攻は花道から。

魔法カードによつて呼び出されたのは、小さな小さな妖精。

花道が手を伸ばしたその手のひらに、ふわりとその妖精は舞い降りた。

『雪咲 花道いきなりのワン・フォー・ワン！』

そして出てきた小さな妖精！花道は六花使いだ！』

「ひとひらは、1ターンに一度、デッキから六花モンスターを手札に加えるか墓地に送る効果を持つ。これにより、僕は《六花精ボタン》を手札に。

続けていくぞ。ひとひらをリリースし、手札の六花精ボタンの効果。自身を特殊召喚する。」

手のひらにいたひとひらが消え、空から雪と共に舞い降りてくる中華っぽい服装の少女。

「植物族モンスターによつて特殊召喚されたボタンは、登場時にデッキから「六花」魔法・罫カードを手札に加える事が出来る。ボタンの効果を発動。更に、ひとひらがリリースされた事に反応して墓地にいる《六花精エリカ》の効果。自身を墓地から特殊召喚す

る。」

淡々と、だが確実なプレイングをこなす。

それは、雪咲 花道という男の、この学園で過ごしてきた、そして、今まで使い続けてきた経験値故に。

「エリカを特殊召喚。ボタンの効果で魔法カード《六花絢爛》を手札に加える。」

墓地から現れる、和服の少女。

召喚権を消費する事なく、2体の中型モンスターを並べる。

「エリカとボタンはともにレベル6。2体でオーバーレイ。」

「エクシーズ…」

「咲かせ…咲かせ…咲かせ…」

舞い降りて景色を染めろ。

ランク6。《六花聖カンザシ》

2人の少女は空へと飛び上がると、2つの光となってぶつかり合い、雪へと変わる。

それと共にふわり、雪のように空から舞い降りてきた和装の少女。

ニコリと、野原に咲く小さな花のように、可愛らしい笑顔を見せる。

六花聖カンザシ 守備力2400。

『天宮、雪咲どちらも先攻でエクシーズ召喚！』

時代はエクシーズなのか!』

「ふん…続けるぞ。手札から《薔薇恋人(ばらラヴァー)》を召喚。薔薇恋人をリリースして、手札から六花絢爛を発動。デッキから「六花」モンスターと、それとは名前の違う、レベルの同じ植物族モンスターの2枚を手札に加える。僕はレベル8の《六花精スノードロップ》《六花精ヘレボラス》を手札に。

そして、モンスターがリリースされた事によって六花聖カンザシの効果を誘発。エクシーズ素材を一つ取り除き、自分、相手の墓地からモンスターを特殊召喚する。六花のひとつひらを特殊召喚。」

再びフィールドにやってくるひとつひら。

とはいえ、これで終わりではない。

「ひとつひらをリリースし、手札の六花精スノードロップ効果発動。このターン植物族しか出せない制約を受けるが、手札から自身と他の植物族モンスターを特殊召喚する。現れる、六花精スノードロップ、六花精ヘレボラス。」

止まらぬ展開。

場にまたしても2体のモンスター。

『レベル8が2体！来るぞ黒崎！』

「レベル8エクシーズか……！」

「その通りだ。見せてやるよ、僕の切り札。

君の舞台は整えた。

雪景色に咲く美しき花。それが君。

君の道を邪魔する者など僕が取り払おう。

僕らは共に歩もう。

エクシーズ召喚。ランク8。

《六花聖ティアドロップ》

床に撒かれている雪が舞い上がり、美しき女性が現れる。

その女性は、花道の側に。

六花聖ティアドロップ 攻撃力2800。

「手札から永続魔法《六花の風花》を発動。

更に、手札を1枚セット。

これで僕のターンは終了だ。

さあ、僕らに歯向かって来い。獅子神 王牙の弟子。」

花道のライフ 8000

手札 残り0

花道の盤面

モンスターゾーン

六花聖カンザシ 六花聖ティアドロップ

魔法・罨ゾーン

六花の風花 セット。カード1枚。